

チユニジア紀行



イブン・ハルドゥーンと旅

ハビブ・ブルギバ通りは、真ん中に広い遊歩道を持つチユニス・メインストリートである。その西の端にある独立広場にイブン・ハルドゥーンの銅像は建っている。旧市街（メディナ）と新市街を分けるバール門（海の門）から、東へ三百五十メートルほど行った所といった方が分かりやすいかもしれない。

アラブ風のゆったりとした法衣をまとい、頭にターバンを巻き、豊かな口ひげを蓄えたイブン・ハルドゥーン像は、ニメートルほどの台座の上に建ち、周囲の二階建ての建物と肩を並べるほど堂々としている。深い切れ長の目は、透徹した思索にふける人の持つ鋭さをもって前を見据えている。胸のところに両手で抱いている分厚い書物は「人類の知的遺産」とも称される彼の著書『歴史序説』であろうか。

私は、このチユニア紀行を、チユニス生まれで、中世アラブ世界に生きた大歴史家、イブン・ハルドゥーンのことから書き始めたいと思う。一三三二年にチユニスに生まれ、一四〇六年にカイロに死んだ彼の生涯は驚くほど波乱に満ちたものだった。

彼は七十三年の生涯をかけて、当時のアラブ・イスラーム社会を激しく動き回った。アンダルシア、マグレブ、エジプト、アラビア、シリアと放浪し、ある時は一国の宰相、ある時はクーデターを画策する陰謀家、ある時は学者や裁判官のトップとして毀誉褒貶の中に劇的の人生を生きた。

彼が生きた十四世紀のマグレブ世界は諸勢力が乱立する混乱に見舞われていた。モロッコではマリーン朝、西アルジェリアではザイヤーン朝、そして東アルジェリアからチユニア、リビアにかけて

はハフス朝と不安定な国家が林立する。イスラーム世界を束ねた大帝国だったアッバース朝はその権威を失って久しく、一二五八年にはモンゴル帝国によって首都バグダットが陥落し、息の根を止められてしまう。イスラーム社会の最高指導者カリフの名は有力勢力の庇護のもとで、宗教的権威としてのみ生き延びている状態だった。

アンダルシアでは、レコンキスタの名のもとにキリスト教徒の反撃が激しさを増し、イスラーム勢力は急速に力を失ってゆく。イブン・ハルドゥーンが仕えてい



イブン・ハルドゥーン像

たナスル朝も一四九二年には滅亡してしまふ。イスラームの海だった地中海



14世紀の地中海世界

にはノルマン人やイタリアのジェノバ、ピサ、あるいはイベリアのバルセロナなどの都市国家群が進出してきており、イブン・ハルドゥーンはこうした混沌の中で身に着けた知恵や技を生かせる場を求めて遍歴を重ねることになる。

彼の名を世界にとどろかせたのは、人間の文明の本質について考察した『歴史序説（森本公誠訳・岩波文庫）』である。社会とは何か、国家とは何か、社会や国家はいかにして成立し発展し没落していくのかという文明の本質を踏まえ、た歴史を彼は書こうとした。歴史はたんなる出来事の羅列ではないのだ。

中世が終わりを告げ、近世が始まろうとするはぎまで、アラブ・イスラーム世界はすでにその盛りを過ぎようとしていた。その中で彼は没落に向かいつつある己が住む世界を臆することなく見つめようとしたのだ。



『歴史序説』では文明の興亡が、遊牧的生活を基盤とする「バドゥ・田舎的なもの」と都市生活を基盤とする「ハダール・都会的なもの」という二つの社会の相互作用によって描かれる。

「バドゥ」とは、彼が生きたマグレブ(西方アラブ諸国)の沙漠や草原のことであり、遊牧民や農耕民がいる社会である。厳しい環境の中で最小限度の食糧を得ることさえ容易ではない。これに対して「ハダール」は人間社会の発展の頂点であり、豊かな物資に恵まれた社会で、都市での定住性を特質とする。

バドゥに生きるためには、厳しい環境

に立ち向かうための連帯意識や困苦欠乏に堪える強い精神が必要である。これに対し、「ハダール」に生きる都市生活者は自己の生命や財産を守る役割を支配者の手にゆだね、安逸な生活を送る中で連帯意識を失ってゆく。

イブン・ハルドゥーンによれば、新しい国は強烈な連帯意識を持った沙漠の民によってのみ興されうる。人々の連帯意識が歴史のもっとも重要な動因だと彼は見抜いたのである。

厳しい環境の中で強い連帯意識に支えられ国を興した第一世代から、都市の奢侈と安逸の生活に慣れて連帯意識が弱体化する第二世代、犠牲心も団結心もない卑屈な個人主義的な人間と化する第三世代と推移する中で国家は衰退し、やがて滅びてゆく。

世界を旅しつつ、圧倒的な観察と見識で歴史のダイナミズムを洞察したイ

ブン・ハルドゥーンは人類の思想史のうえですべて不朽の名を遺した。シムングラーが『西洋の没落』の中で文明の勃興、発展、成熟、衰退のメカニズムを紐解いて見せたことが、六百年も前にアラブの天才によってすでに成し遂げられていたのである。

二十世紀の歴史家、アーノルド・J・トインビーは、イブン・ハルドゥーンをトゥキディデスやマキャベリと並べ、アラブが



イブン・ハルドゥーンが描かれた10ディナール札

生んだ大天才と高く評価している。私がチュニジア紀行を書くにあたり、その冒頭にイブン・ハルドゥーンのことを記したのは、彼がチュ

ニジアの誇りであることはもちろんであるが、旅とは何かということをもう一度考えてみたかったからである。

大旅行家というと、ヴェネツィア生まれのマルコ・ポーロの名が、真っ先に思い浮かぶが、イブン・ハルドゥーンもけして引けを取らない。彼は当時の文明の最先進地帯、アラブ・イスラーム世界を全行程十一万七千キロに達するという空前絶後の大旅行を成し遂げているのだ。彼の旅程は現在の国でいえば、五十カ国以上にもまたがっている。

イスラームという文化は、もともと「移動する文化」である。アラブ人という遊牧を基本とする民族が担い手となったからばかりではない。イスラームが生まれたメッカは東西を結ぶ交易の街であり、預言者ムハンマドもまた商人だった。交易は常

態であり、人びとのつながりやネットワークが何より大切にされた。

旅をする者は商売のためであれ巡礼のためであれ、様々な理由から都市という結節点に集い、交流し、再び旅立っていった。このようなイスラーム社会では、都市と都市を結ぶ交通路が整備され、都市には旅人を支える公共施設があり、宿泊や衣食が無償で提供されたという。

しかし彼にとって楽な旅ばかりだったわけではない。足かけ三十年にもおよぶ旅は幾度も病に倒れ、盗賊や異教徒に襲われるという苦難の連続でもあった。それでも彼は旅の中で真実を知ることによる無上の喜びを感じ、世界を自分の目で見届けたいと旅を続けたのだ。

私も及ばずながら、イブン・ハルドゥーンのように旅をしたい。この

地球には多様な人たちが多様な暮らしを営んでいる。太陽を拝む民族がいれば、月に祈る民族もいる。人類は皆兄弟ではない。多様な思考方法、生きざまを持った「他人」で構成されている。

だから安易に分かったと思うと、誤解が生まれやすい。理解するためには、根気よくその土地に、その人たちに触れてみるしかないのだ。旅はそのためにある。それは書物のみから得た知識を詰め込み、観念的で抽象的な論理を振り回した挙句、行き詰った若き日の反省からたどり着いた私の生き方でもある。

今回の旅を通じて私が知りたいのはまずイスラームとは何かということである。イスラーム社会は日本人にとってなじみが薄い。日本ほどムスリムが少ない国は世界で稀なので

ある。イラクのIS（イスラム国）

やアフガニスタンのタリバンなどのニュース報道から、好戦的で自爆テロもいとわず、厳しい戒律で人権を抑圧するといったネガティブなイメージを持つ日本人が圧倒的に多いのではないだろうか。

しかしイスラムがそんなお粗末なものなら世界十六億人の人々に受け入れられるわけがない。チュニジアはムスリムが国民の九割を越すイスラム国家である。チュニジア訪問を通じてイスラムとはいかなる宗教なのか、ムスリムとはいかなる人たちなのか、つぶさに観察したい。もう一つ関心があるのが、イスラム社会特有のメディナの存在である。メディナはアラビア語で「都市」の意味する言葉であるが、中世の雰囲気を色濃く残し、市壁で囲まれた

建物が密集する中東の旧市街を指すことが多い。

チュニジアでは首都チュニスのメディナの他、カイラワンやスースのメディナが古い形態をよく残しているとしてユネスコの世界遺産に登録されている。これらの都市はアラブ軍の防衛拠点として建設が始まった。

日本の中世の街は平安京に見られるように基盤目状の街路を特徴とする整然とした構造である。これに対しメディナは曲がりくねった迷路のような街路を特徴とするといわれる。なぜそのような街が作られたのか、その構造はどのようなになっているのか、目に映る個々の物を凝視し、また身のまわりの物音やにおいをも無視せず、五感で得られた情報に基づいて具体的に考えてみたい。

メディナ（旧市街）とは

チュニスにはチュニジア共和国の首都である。ポエニ戦争でローマに滅ぼされたかの有名な古代カルタゴの遺跡からは十五キロほど離れた場所にある。もともとは古代フェニキア人によって建設され、紀元前五世紀頃からは、カルタゴの衛星都市としてオリブ油の交易で栄えたという。しかしカルタゴが第三次ポエニ戦争（BC一四六）によってローマに滅ぼされると、ローマの属州のひとつとなった。

現在に残るチュニスのメディナの基礎を形作ったのは、七世紀の終わりに北アフリカに進出したアラブIIイスラム勢力である。彼らは六九八年には東ローマ帝国の属領となっていたチュニスを占領し、これ以降この街はアラブ人によってイスラ

ム都市として開発されることになった。

十三世紀になるとベルベル人が興したハフス朝がチュニスへ遷都。ヨーロッパとアフリカの中継貿易で発展し繁栄したハフス朝のもとで、首都チュニスは、北アフリカの商業、学問と文化の中心として栄えたという。冒頭で紹介したイスラーム世界が誇る大歴史家イブン・ハルドゥーンはこのハフス朝時代のチュニスで生まれ育ったわけだ。

十四世紀には、メディナの街並みも現在ある姿に整えられた。いまでもモスクやマドラサ、宮殿、霊廟、ハمام（公衆浴場）など当時の繁栄ぶりを物語る多くの貴重なイスラーム建築が残っており、一九七九年にはメディナ全体がユネスコの世界遺産に登録された。



メディナの地図

十四世紀の日本といえば、鎌倉時代後期から室町時代の初期にあたる。このころの街並みがそっくり残っていて、今もそこに人々が生活しているというのだから驚かざるをえない。前書きはこのぐらいにして早速、メディナ散策に向かうとしよう。案内してくれるのはチュニス生まれでガイドのファーティマさん(40)。

大学で歴史学を学び教師を目指していたのだが、就職難のチュニジアでは教職を得ることがおぼろしく一念発起、独学で日本語を習得し、日本語ガイドの資格を取ったという才媛である。色が少し浅黒いが、ブラウスにジーンズといういでたちはアラブの女性であることを忘れさせてくれる。

さて、イブン・ハルドゥーン像から西を見るとアーチを描く古めかしい門が新市街を貫く大きな通りの真ん中に見える。メディナへの入り口の中で最もポピュラーなバール門（海の門）である。強烈な日差しを避け、大きな並木の下の日影を選んで、ゆっくりと近づいていこう。

この門がバール門と呼ばれるのは、港に最も近い門だったからである。今でもバール門からまっすぐ東に向

かうとチュニスの港に至る。中世には海はもっと近くまで迫っていたという。現在の新市街は低湿地の埋め立てによって生まれた部分が多い。パール門が新市街と旧市街を分ける境になる。

石のブロックで構成されたパール門を潜ると、真ん中に噴水があるビクトワール広場に出る。実は私が泊まっているホテルはこの広場に面したロイヤルビクトリアというホテルだ。かつてイギリス大使館が所有していたというだけあってなかなか格調の高いアールデコ様式の建物だ。ウインストン・チャーチルなど政界関係者、チールズ皇太子などの王室のメンバーなど有名人がこの歴史的建造物を訪問し、宿泊している。私の泊まっている二階の部屋から広場を歩き交う人たちの流れを眺め



ホテルの部屋から見たパール門とビクトワール広場

ていると何時間でも飽きない。またおしゃやかなカフェも併設していて、ミント・ティーを飲みながらのんびりするの楽しい。「ファーティマさん、このパール門がメディナの東の端になりますね。メディナには門がいくつあったんですか」

「七つの門があって、そこからだけ

しかメディナに出入りできなかったといわれています。しかしいまは取り壊されて、残っている部分はずかになっしまいました。このパール門の周囲にも高さ六〜七メートル、厚さ二〜三メートルのスール（市壁）がありました。フランス人によって壊されて、いまある広場が造られました」

「そうするとこの門は、往時の面影をとどめている貴重な遺構ということになりますね」

「北東にカルタジエナ門、北側にスイーカ門とブナート門、西側にメナラー門、南側にジャズイーラ門がありました。門はそれぞれの役割を持っていたといいます。たとえば、このパール門はヨーロッパのキリスト教徒商人がフォンドックという宿泊所に出入りするために頻繁に使われ



バール門(右)とロイヤルビクトリアホテル

ました。またカルタジエナ門はカルタゴ遺跡から利用できる石柱などを運び込むために良く使われたといいます」

「なるほど。いまと違ってメディナ

へは七つの門からしか出入りできなかったわけですね」

「そうです。門は夜には閉じられ、朝になると開かれました。夜間の人の出入りは厳しく制限されました」

ファーティマさんはメディナの観光地図を目の前に広げ、指さしながら説明する。異民族同士の攻防が激しかったマグレブでは街を囲む防壁は必須のものだった。写真はチュニスの南約一四〇キロに位置するチュニジア第三の都市スースの街を囲む防壁だが、その高さと同文さに驚く。刀や弓矢での戦いの時代には、大きな防衛能力を発揮したに違いない。

チュニスのメディナを囲んでいた市壁は周囲約四キロメートル、長径一・五キロメートル、短径〇・七キロメートルのたまご型をしていた。



世界遺産スースのメディナを囲む城壁

所々にブルジュという望楼を備えていて、強固な防衛体制がとれるようになっていたという。

メディナの面積は二七〇ヘクタールというから、小さめのゴルフ場ぐらいの広さだ。地図をもとにメディナの主要部分を紹介しておこう。この地図は上が西、下が東になってい



メディナで売っていた観光地図

る。地形は下から上に向かって緩やかに坂になっている。いま私が立っているビクトワール広場とパール門が地図の一番下中央に描かれている。そこから二本の主要な道がメディナの奥に向かって伸びている。右がカスバ通り、左がジャマー・ジトゥーナ通りである。この二本の通りとそ

の間を結ぶ小道がたくさんの店舗が並ぶメディナの商店街（スーク）である。

どちらの通りも地図中央に描かれているジトゥーナ・モスクに達する。このモスクがメディナの中心で、チュニスはこのモスクを核にして発展したとってよいだろう。

ジトゥーナ・モスクをさらに奥へ進むと、かつて支配者の居住の場であったカスバ（王宮）の跡に出る。

カスバはメディナ全体を見下ろすように一番高いところに建っていることになる。王宮の隣には王家御用達のカスバ・モスクがそびえ、ハフス朝の布告はこのモスクから発せられたという。

ハフス朝治下のチュニスはプロヴァンスやカタール・ニャ、イタリア半島の共和国から外国人商人が頻繁に

到来し、地中海交易で繁栄した。チュニスはイブン・ハルドゥーンの時代からきわめてコスモポリタンの街だったのだ。そして十二世紀から十六世紀にはイスラーム世界で最大で最も裕福な都市の一つだった。

パール門からメディナの中心であるジトゥーナ・モスクに向かい、カスバ・モスクに抜けるあたりがメディナのもっともにぎやかなところだ。狭い通路の両脇にはいろんなものを商う店舗が隙間なく並んでいる。

もちろんその周囲には密集した住宅街が広がっている。メディナの中には現在も約十一万人が暮らしているというのだからものすごい密集度合いである。そして住宅街の中には生活に密着した食料品や日用雑貨を扱う店が点在している。また繁華街で扱う様々な商品、例えば革製品や



平屋根の建物が埋め尽くすメディナ

金属製品や木工製品などを作る町工場もメディナには欠かせない存在だという。

もちろんムスリムにとって欠かせないモスクは大小取り混ぜてメディナの至る所にある。日本でいえば町内会に一つといったところか。

スーク（商店街）を歩く

さて地図でメディナを概観したところで、さっそく中に足を踏み入れることにしよう。まずはメディナの中でも一番賑やかなスーク（商店街）を訪ねるべきだろう。

いま私の立っているビクトワール広場からメディナの中に二つの大きな通路が伸びている。右がラ・カスバ通り、左がジャマー・ジトゥーナ通りである。どちらの通りも両側にびっしりと商店が並ぶ繁華街であるが、今回はジャマー・ジトゥーナ通りを進むことにする。この道はメディナの中心でもあるジトゥーナ・モスクに達する道である。

道幅はおよそ二間といったところか。迷路といわれるメディナ内の通りとしては割合まつすぐである。通りは奥に向かってわずかに上ってい

る。地面は石畳で覆い尽くされていて、真中がわずかにくぼんでいるのは排水の為であろう。長年にわたって人の足で踏まれ続けた石畳はツルツルに磨かれたようになってい

通りの両脇にはびっしりと商店が並んでいる。どの店も間口は狭く一間から二間ほど。しかし奥行きがある店が多い。これは恐らく表通りに面したスペースを多くの商店が利用するための知恵だろう。

通りの入口あたりに固まっているのがサンダルやカバンなどの革製品の店。衣料品の店も多い。どの店も品ぞろえにそんなに違いがあるようには見えない。

「ファーティマさん、同じような店が固まっついて喧嘩にならないんですかね」

「朝の開店間近に來ると、店のおや



サンダルはチュニスの名物

じさんたちが通路に椅子を出して一緒にお茶を飲んで談笑しているところに出くわします。同じところに店を構えることで集客力がアップするといったメリットがあるんじゃない

でしょうか」

「なるほど。共存共栄という訳か。ところで商品が通路まであふれていますね」

「何センチまで許されるという決まりごとがあるようです。しかしこうやってみると全部がそれを守っているとは思えませんね」

ファーティマさんは苦笑しながら通路の一角を指さした。

スークの第一印象は見かけられるものすべての乱雑さである。ジトゥーナ通りはチュニスのメディナの通路の中でも一番直線的なものであるが、それでも微妙に曲がっているし、ずれたりよじれたりしている。しかし実際に足を踏み入れてみると、私にはこの乱雑さは不思議に違和感なく受け入れられる。それどころかスークの中にあると気分が高揚してくる。

スークの大部分は通路の両脇に商品がうずたかく積み上げられているし、天井はアーチ型の屋根で覆われている。地面は人の足でつるつるに磨き上げられた石畳が覆っている。つまりスークの中にあるということは、完全に自然を排除した人工的な空間の中に閉じ込められているのである。

これはどんぶり飯を食べる時の恍惚感に似ているのではないかとふと思った。左手でどんぶりを持ち上げ、首を突っ込むようにしてどんぶり飯を書き込んでいると、どんぶり以外の視界は完全にふさがれる。食べることに全神経が集中するからどんぶり飯はうまい。スークの中を歩いていて気分が高揚するのはこれと同じ原理だ。

しかしまだ買い物の予定はないし、



狭い店舗に多くの商品を効率的に展示する

とりあえずスークの全体像をつかおのが目的だから、周囲をきよろきよろしながらも冷静さは保っている。人ごみに紛れ、視線を右にやり左にやりたりしながら歩いていると「ニーハオ」と頻繁に声を掛けられる。声のかけ方を見ると中国人観光客が日本人に比べて圧倒的に多い



アーチ状の屋根で覆われ屋なお暗い

ことが分かる。無視して通り過ぎると、それを見ていた売り子が今度は「コンニチハ」と声をかけてくる。中国人観光客が多いのには理由が



金属製品の店も多い

ある。二〇一五年、チュニス郊外にあるバルドー国立博物館で武装集団によるテロ攻撃が発生した。二十一名が亡くなったが、日本人も巻き込まれ三人が死亡した。このニュースは日本でも大きく報道されそれ以来、日本人観光客の足はぱったり止まったという。替わって増えたのが豊かになった中国人観光客である。アジ

ア系の顔を見たらまず「ニーハオ」という訳だ。

ところどころに茶店もある。お茶を飲んだり水煙草をくわえたりしているのは、大体が年寄りの男である。彼らは暇で退屈しているのか、私がアラブ服を着ているせい、親しげに声をかけてくる。

昔ながらの茶店で、路上に椅子を持ち出してお茶を飲んでいる恰幅の良い男が満面の笑顔で「こんにちは」と手招きするので立ち止まると、一緒にお茶を飲んで行けという。

日本人かと聞くのでうなずくと、フランス語はしゃべれるかと聞く。私が首を振ると、ファーマーさんの方に向き直り、何事か話し始めた。お茶に砂糖をどのくらい入れるか聞いていたのだ。

チュニジアは一八八一年から一九

五六年に独立するまでフランスの保護領だった。公用語はアラビア語だが、話し言葉はチュニジア方言が強いという。フランス語は第二公用語的に多くの人に使われる。

ラシードと名乗った男は、近くで革製品を商っている商店主だという。私に小さな椅子を勧めると、「ジャポネ、プルミエ」とか「トヨタ、トレビヤン」とか盛んに日本のことをほめる。

コロナ禍で外国人旅行者が激減したのだから商売は大変だろうと話を振ってみた。

「去年はまったくダメだったが、今年になってフランスやイタリアからの客がちらほら来始めている。しかしうちは地元のお客が多いから、良い商売をしていますよ」

「ロシアのウクライナ侵攻で物価が

上がっていると聞くけど」

「商売にはお客さんがどんな商品を見ているか鑑識眼が必要ですよ。適正な値段で売るためには仕入れのノウハウが欠かせませんからね。う



革製品の商店主ラシードさん

ちは値上げなんかまったたくしていませんよ」

「商品に値札が付いていませんね。多くの商品の値段がすべて頭の中に入っているんですか」

「もちろんです。商人というのはただ単にモノを売ればいいというものではありません。学者と同じように様々な知識を身につけたものしかないのです」

同席していた友人らしい男が大きなうなずいて、話に割り込んできた。

「商売をするものは、神を敬う敬虔な心が必要です。誠実さ、進取の気性、思いやり、こういった資質がなければ真の商人とは言えません」

「しかし外国人観光客に高い値段を吹っかけて、だます商人もいると聞きますが」

私の発言をアラビア語に訳したフ



たくさんのカラフルなスパイス

しがっているのか、価格と価値はイコールではありません。たくさんのお客さんが同じ価値観を持っていることの方が不思議です」

ファーティマさんもラシードという商店主の意見に賛成のようだ。

「ここに住んでいけばいくらで買うべきか、すぐ見当がつかずすよ。店が粗悪な商品を高く売れば客足はばったり途絶えますよ」

「だいたい観光客が土産物や奢侈品を、時間にせかされてあわてて買いたる場合、だまされるのよ」

ファーティマさんは両手を大きく広げて、私の同意を求めようとする。

「いやいや、だますという言葉はいけません。その外国人観光客は支払った価格に見合う価値を認め、ご自身で納得して買っていったわけで、だまされたわけではありませんよ」

ファーティマさんの言葉を聞くなり、ラシードさんは我が意をえたりとばかりに身を乗り出して、とうとうとしゃべり始めた。

「ここに革のバッグがあるとします。このバッグの価値は一律的な値札で決められますか。あなたの懐具合、あなたがどのくらいこのバッグを欲

ラシードさんはファーターイマさんの「だまされる」という言葉をあくまで否定したいようだが、顔つきは穏やかなままである。

ミント・ティーはお茶の上に緑のミントの葉を載せたものだが、カップを持ち上げて口もとに運ぶと清涼感のある香りがして気持ちが落ち着く。私は砂糖なしでいただいた。ラシードさんは私とファーターイマさんにミント・ティーを奢ってくれたが、何の商品を勧めることもなかった。ただ「ご都合のよろしい時に店にお立ち寄りください」と別れの挨拶をしただけだった。

ジトゥーナ通りは、地方からやって来るお上りさんや外国人観光客が一番多い通りだけに、土産物らしきものを扱っている店が多い。革製品、布製品、銀製品、陶器、カーペット、

香水、ジュエリーなど様々な店舗が軒を連ねている。

しかしよそ行きのものばかりを扱っている店ばかりかというところでもない。ホブス・タブーナと呼ばれるチュニジアの伝統的なパン、肉やスパイス、豆類や乾物、チーズ、ピザ、マクルードというデザートや蜂蜜がたっぷり入った甘い菓子などの食料品を扱っている店も多い。また移動式屋台とでもいったらいいのか、



オレンジジュース屋

半畳ほどの板の上で商売をしている人もいる。搾りたての果物ジュース屋さんには感激した。こぶし大のオレンジを五個も絞り、たったの一デイナー（四二円）。渴いたのどを潤すのに重宝した。

パン屋さんには商売の邪魔にならないように話を聞いてみた。

「このパンは近くでつくられているんですか」

「そうだよ。わしがタブーナ(窯)で毎日焼いている。親の代からだよ。」

「たくさんは作れないから、ここにある分だけだ」

「売る場所は決まっているんですか」

「そうさ。いつもここで売っている。そうしないとお客さんが困るだろう」

「ちょうど買い物がごを下げた女性が来たので評判を聞いてみた。」

「私は近くに住んでいるんだけど、



自家製のパンを売る

いつもここで買ってるわ。焼きたてだから、柔らかくておいしいのよ。それに安いのよ」
「パンは毎日食べますか」

「そうね、ほとんど毎日食べるわ。アラブ伝統のホブズ（円盤状のパン）やバゲット（フランスパン）よ。あなた日本人？日本人は何を食べてるの」

「日本人はライスです。しかしパンを食べる人も増えていきます」

「私もライスは時々食べるわ。ターメリックやパプリカ、玉ねぎやハーブのソースで混ぜ合わせたお料理よ。コスクスやマカロナはもっと頻繁に食べるわ」

混ぜご飯のようなものを想像したが、ファータイマさんが説明に困っているようだったから、それ以上突っ込んで聞くのはやめた。パンは半日もしないうちに売り切れてしまうという。

ファータイマさんの話では、小麦輸入量の40%をウクライナに依存

するチュニジアでは、ウクライナ情勢悪化の影響で、パンや様々な食糧品が値上がりしているという。仕事がないのに値上がりばかりで生活が大変だと、彼女は食品売り場を見るたびにため息をついた。コロナの影響で失業率も悪化しており、若者の半分は職に就けない状態だという。

ジトゥーナ通りにはフォンドックと呼ばれるかつての隊商宿もある。多くが閉鎖されたり荒れ放題になっていたが、近ごろきれいに改装されたレストランとして営業している店が近くにあるという。昼食も近いので立ち寄ってみることにした。エル・アタリンという店名だが、同名のフォンドックをレストランに改装したものだというのが、広い中庭を上手に利用してテーブルを並べている。激しい人通りの通りから、わずか



レストラン エル・アタリンの入口

に入っただけなのに静かで明るい。かつては一階が取引所や倉庫や厩（うまや）として使われ、二階が商人たちの宿泊のための部屋だったという。地中海や沙漠を超えてきた隊商たちが、駱駝や驢馬の荷を下ろし、運んできた商品の取引に精を出し、またひと時の安息を得た場所なのだろう。

私が周囲を眺めまわしていると黒服に蝶ネクタイを締めた支配人らしき人物が出てきた。まだ開店前なのかと聞くと、「本日は予約でいっぱい



かつての隊商宿の広い中庭を利用したレストラン

い」だと申し訳なそうに言う。観光客もまだ少ないし景気も悪いというのに結構な繁盛ぶりだ。コロナの影響で営業できなかつた期間が長かつただけに、その反動もあるのだろ

う。パーティーマさんによるとホテルや旅行代理店とタイアップして、フランスやイタリアの団体観光客を集めているのだという。

愛想の良い支配人らしき男は、二階にはいろんな店があるのでぜひご覧くださいという。勧められるままに二階が上がって見たが、香水や女性用の結婚衣装、ハンドバック、貴金属など女性むけの高級品を扱う店が入っている。わたしには縁のないものばかりなので、早々に退散することにした。

再び喧騒の通りに戻ったが、ジトウナー・モスクはもうすぐ近くらしい。通りには香水や貴金属を扱っている店が増えてきたが、モスクの周囲では高価なものを扱う店舗が意図的に配置されてきたという。

高級レストランでは満員で断られ



香水専門店

たが、そろそろおなかもすいてきたし、何か食べたくなってきた。ファーマーティマさんに、簡単な昼食を食べられる店はないかと尋ねると、近くのファストフード屋に案内してくれた。

マルフーフというチュニジア式のマクドナルドみたいなもので、春巻きのようなもので肉や野菜を包



ファストフード屋

んで食べるのだという。香辛料の風味と唐辛子の辛みが効いたチュニジア発祥のハリッサという調味料をたっぷり付けて食べる。四ディナールでまさに庶民の味だ。

マルフーフ屋を過ぎると、ジトゥーナ・モスク前の広場に飛び出した。地図で見ると、ここがいくつかの道

が集まる結節点になっているが、意外と狭い。二車線の自動車道路ほどの幅しかない。モスクに向かいあつて土産物屋が軒を連ねている。聖なるモスクと俗なる商店がごく近くに隣り合っているわけだ。

ヨーロッパの大きな教会の前などには必ず大きな広場がある。広場は街のシンボルである。しかしメディナでは広場を造るといった感覚は初めからないように見える。まずジトゥーナ・モスクができて、それを取り巻くように商店や住宅ができたのだが、たくさんの人が集まるジトゥーナ・モスクの周りは少し間隔をあけておこうという配慮が働いたという程度の広さである。

名前の由来は諸説あるようで、一説によるとモスクを建てようとした今の地に一本のオリーブ（ザイトゥ

ーン)を見つけたからだといわれているが真偽のほどは定かではない。

建設時期についても諸説あるが、ウマイア朝軍がチュニスを攻略し、街づくりを始めた七世紀末からそんなに長い期間モスクがなかったとは考えられないから、それからしばらくした八世紀初めには建設が始まったと考えられる。マグレブではカイラワンのオクバ・モスクに次いで古いモスクだ。

もちろんそれ以来、何回も改築が繰り返されたことは間違いない。いまのような大規模なモスクになったのはアグラブ朝時代の九世紀の半ばといわれている。

イスラームのモスクはキリスト教の聖堂などと比べると、外観は素っ気ないほどシンプルである。建物の外観として見えるのは、石積み



ジトゥーナ・モスク前の広場

にイスラーム特有なアーチの連なりがある程度で、聖なる空間を飾り立てようとする美的な意図はあんまりこめられていないようだ。

設計者は、建物を外から見たときに、人々に敬虔な気持ちや感嘆の念をわきおこさせようという意欲をまったく持っていないようにみえる。そもそもモスクの周囲の空間は店舗がびっしり埋めていて、モスク全体を眺めるスペースさえない。写真を見てほしい。人々の後ろにア



モスクのベランダから広場を見下ろす

一丁型の入口があり、数段の石段あるのが見えるだろう。石段を登ったところがモスクの床面である。つまりこのモスクは奥に向かって勾配のある斜面に建てられていることが分かる。パール門からここまで五百メートルほどジトゥーナ通りを歩いてきたが、気をつけてみなければわからないぐらいの緩やかな上り坂だった。しかしこのあたりまでくると坂の勾配が少し急になった気がする。上の写真はモスクの床面から広場を見下ろしたものであるが、かなりの段差があることが分かるだろう。

早速、中を見学しようと石段を登り、木製の大きな扉を押したのだが、びくともしない。扉が閉まっているではないか。入口の前の土産物屋の店員に聞くと、いまは閉館中で夕方には開館するという。ジトゥーナ・



道路奥にシデイ・ユーセフ・モスクのミナレット

モスクの見学は後回しにして、とりあえずメディナの西の端であるカスバ広場まで行ってみることにした。ジトゥーナ・モスクの脇を曲がるとシデイ・ユースフ・モスクのミナ

レットが見えてくる。八角形のきれいなミナレットだ。チュニスに建設された最初の八角形のミナレットであり、正方形の土台の上に立っている。上部には木製のバルコニーが設けられており、ここから礼拝を呼びかけるのだろう。バルコニーは緑色のタイルで覆われたピラミッド型の屋根を持っている。

チュニスはオスマントルコの支配下に入ってから繁栄を続けた。シデイ・ユーセフ・モスクは十七世紀、オスマントルコのチュニス総督ユーセフによって建てられたものである。ジトゥーナ・モスクのファザードを設計したスペイン建築家の手によるものだという。大きなモスクではないが、オスマントルコやアンダルシアの影響を受けたデザインが美しい。



八角形のミナレット

シデイ・ユーセフ・モスクの隣は
ダール・エル・ベイと呼ばれるフサ
イン朝（一七〇五〜一九五六）時代
の領主の宮殿で、現在も首相官邸と
して使われている。

ここまでくればカスバ広場はすぐ
先だ。カスバ広場は、フランスから
の独立を記念して、整備された広場
で、立派なモニュメントを取り囲む
ようにチュニジアの国旗がはためい
ていた。モニュメントの向こう側に
見える建物は市庁舎である。

これでメディナの東の端から西の
端まで縦断したことになる。多くの



カスバ広場と独立記念モニュメント&市庁舎

車が駐車していることからわかる
ように、カスバ広場の先はもう新市
街である。バーブ門からカスバ広場
まではおよそ一キロメートルで、よ
そ見をしないで歩いてくれば十五分

ほどだろう。

一番のメインストリートをあちこ
ち突っかかりながら歩いてきて、メ
ディナの中心部についてはおおよそ
の見当はついたが、ファーティマさ
んにぜひとも案内してもらいたい場
所がもうひとつあった。それはチュ
ニジア独特の鍔なし帽子、シエシア
のスークである。スークはカスバ広
場とジトゥーナ・モスクの間にあっ
たから、すぐ近くにあるはずである。

実はこの帽子には思い出がある。

私は四十年前にもチュニスを訪れて
いる。どこに立ち寄って何を見たか、
いまとなっては記憶があいまいだが、
このシエシアの工房で若い職人と
長々と話し込んだことは覚えている。
シエシアはフェルトで作られ、大概
はえんじ色である。十八世紀にはチ
ユニスの主要な輸出品の一つだ



シェシアの工房

った。工房を兼ねた間口の狭い店が軒を連ね、シェシアのスークでは何千人もの人が働いていたという。

シェシアは一見単純そうだが、洗練された職人の腕が不可欠なのだということをその時知った。記憶が正しいければ、メディナでシェシアの職人になるためには、組合の熟練試験官の前で実技試験があり、出来栄を

を徹底的に審査されるということだった。私が話した若い職人は、シェシア造りに誇りを持っているようだった。

私はその職人から頭の寸法を測ってもらい、シェシアを買った。そしてそのシェシアを被って歩くことに



よってメディナの人たちから親近感を持って接してもらうことになったのである。

現在、メディナではこのシェシアを被っている男性はあまり見かけないが、四十年前はかなり多くの男性が被っていた。下の写真は四十年前、三十四歳の時の私である。メディアのどこかの街角で撮られたものである。多くの男たち、とくに老人がシェシアを被っていることが分かる。

多くの男が街角に集まって話し合いをしているように見えるが、なにかの祭か集会があったのかもしれない。私もなぜか話し合いの輪の中に入っているように見える。買ったばかりのシェシアの色が鮮やかである。

「ファーティマさん、シェシアを被っている人は少ないですね。私が訪れた四十年前にはもっと沢山の人が



シエシアを被る 40 年前の筆者

被っていたように記憶しています」

「古い伝統的なものは徐々に失われて行きます。最近では金曜礼拝でも被っている人は少なくなりました。多くの人が被るのは宗教的なお祭りの時ぐらいでしょうか」

「すると造る人もだいぶ少なくなっ
たんでしょね」



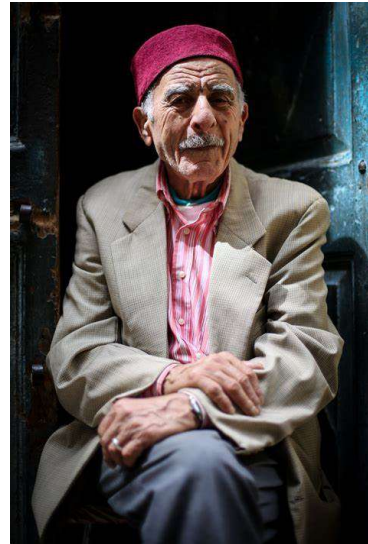
「ここのシエシアはご覧のように手作りですが、安い工業品も出回っています。いまシエシアのスークはいろいろな色、形、装飾のシエシアを作って、生き延びようとしています」
ファーティマさんは店頭に並べられたシエシアを手にとって、これはお土産用、これはアルジェリアやり

ビアへの輸出用と説明してくれる。いまや生産した80%はアフリカ諸国へ輸出されているという。衰退しつつあるシエシアのスークに同情した訳ではないが、今回もまた私は伝統的なえんじ色のシエシアを買った。世紀を超えて同じものを造り続けていることに敬意を表したかったからである。

日本の昔からの商店街の多くは、高度経済成長期に壊滅した。大手資本のスーパーマーケットが郊外に次々と出店し、コンビニが街角の商店と置き換わっていった。チュニスでも新市街にはフランス資本のスーパーマーケットが進出している。

しかしメデイナの商店は昔ながらの小資本、個人経営が行われ、それなりの繁栄を続けている。世界遺産に認定されているチュニスのメデイ

ナのスークが、長く伝統を守って
けるように祈らずにはいられない。



ジトゥーナ・モスク

ジトゥーナ・モスクは大モスク、
金曜モスクなどとも呼ばれ、チュニ
スのメディナの地理的な中心であり、
精神的な中心でもある。

ムスリムには一日五回（シーア派
は三回）の礼拝が義務づけられてい
るが、普段は家庭や職場など身近な
場所で行われることが多い。駅や空
港など公共施設にも小さな礼拝室が
備えられている。

私は一昨年、ガイドとドライバー
とコックを雇い、四輪駆動車でモー
リタニアの沙漠をうろついたが、ム
スリムであるガイドらは、沙漠の真
ん中でも車を停めて休憩している間
にメッカの方に向かって毎日祈りを
ささげていた。砂の上に持参のじゅ
うたんを広げ、お祈りの前には必ず
大切な水で手と顔を洗っていた。

大きな岩陰にテントを張って、一
夜を過ごした時のことである。朝方、
小便がしたくなって、テントから少
し離れた場所でズボンの前を開こう
としていたら、コックのラシードが
背中から大きな声で私の名前を呼び、
こちらに向かって走ってくる。

私の前までくると、彼はしきりに
地面を指さしながら「マスジド、マ
スジド」と繰り返すではないか。一
瞬何を言われているのか分からなか

ったが、地面に馬蹄形に並べられた
こぶし大の石の列を見て気がついた。
沙漠の中に彼らが作ったモスクなの
である。ムスリムにとって礼拝の場
所は問わないという良い例だろう。
しかし金曜日の礼拝は特別である。
金曜の正午の礼拝は、ジトゥーナ・



中庭から回廊と礼拝室を見る。ドームのあるところが礼拝室の中心

モスクのような大モスクに集まり、みんなで礼拝するべきだとされている。コーランには、いくら仕事が多忙でも、仕事を放り出してさえも集まれと書いてある。金曜日の正午にはここに千人以上の人が集まり、共同で礼拝するのだ。

モスクには原則として異教徒は入れないといいたいのがガイドブックには書いてある。しかしイスラームにそれなりの敬意を払い、神聖な場所であることをわきまえていけば中庭に入るぐらいはかまわないだろう。中庭を囲む回廊は、初期イスラームのものであるだけに飾りけが少ない。しかし石柱に支えられ、アーチが連続する回廊が心地よいリズムをかもし出している。その単調さを破るのは回廊の中心に位置する礼拝室入り口の小さなドームと柱である。

この部分は他より少しスパンが長く、両側三本ずつの柱でアーチを支えている。回廊が造られたのは、礼拝室と同時にではなく、一世紀ほど後だといわれている。

中庭の床面はすべて大理石のタイルで覆われている。地肌は見えない。誰かが餌をまいたのだろうか、鳩の群れが盛んに何かをついばんでいる。

周囲は背の高い回廊で囲まれており、モスクの外の景色はまったく見えない。ここで見えるのは空だけだ。日本の庭園のように、巧みに自然を取り入れるという発想がまったくない。逆にモスクは徹底的に自然を排除しているように見える。モスクが生まれたアラビア半島は沙漠である。砂の海から自らを守るためには自然と自己との間に壁が必要なのだ。

モスクの原型は預言者ムハンマド

が自らの住居の隣に作った簡単な礼拝所だった。聖なる場は、周囲を日干し煉瓦の壁で囲まれた狭い庭に過ぎなかった。信者たちは塀に沿って椰子の幹で柱を建て、屋根を葺いて日差しをさえぎる礼拝室とした。彼らがめざしたのは、外部から整然とした内部空間を単に囲いとることだったのだ。

中庭の反対側に回ってみよう。単調な列柱とアーチのリズムを破るもう一つの造形物がある。西北の隅に建つミナレットである。ミナレットは礼拝の呼びかけを行うための塔である。

オスマントルク時代の十九世紀に建てられたものだ。マグレブからスペインにかけてのミナレットは円筒型ではなく角筒型をしている。高さは四十四メートルで近くにあるカス



19世紀に建てられたミナレット



バ・モスクのミナレットを模して建てられたといわれている。

塔は三層に分かれており、第一層

は土色の壁に白い連続する漆喰の模様が付けられている。このひし形の網目が繰り返されたような模様は、「セブカ」と呼ばれるマグレブ独特

のもので、アンダルシア、モロッコ、チュニジアなどの建築によくみられる。私はモロッコのマラケッシュのクトゥービーヤ・モスクでこれとまったく同じような網目模様のミナレットを見たことがある。

第二層はアーチ形の五つの飾り窓を持っていて、よく見ると真ん中の窓の奥に礼拝を呼びかけるスピーカーが見える。

第三層の上には三角形の屋根が懸けられており、その上に日本の佛塔にあるような相輪が載っている。

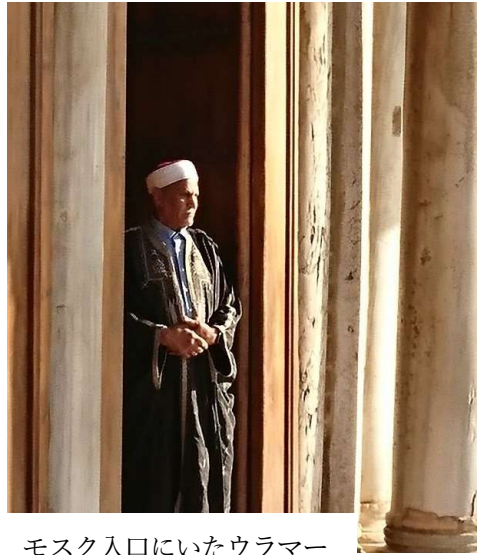
さて、人影がまばらなことを幸いに、ゆっくりと中庭を見せてもらったが、異教徒である私が礼拝室の中

まで入り込むと、いささか気が引ける。

扉の隙間から中を覗き込むぐらいは許されるだろうと、回廊をうろろしている、法衣のようなコートをもと、鍔なし帽子を被った老人が私を手招きする。さては中庭をうろついていたのを注意されるのかと身構えたが、怒っているような様子はない。恐る恐る近づいてみると、はっきりとした英語で、「どうぞ中にお入りください」と言うではないか。

「アッサーラーム、アレイクム。私はムスリムではありません」

アラブ世界共通の挨拶を述べた後、私は正直に答えた。嘘をつくことはどんな宗教でも一番悪いことである。「ワアライクム、サラーム。気にする必要はありません。モスクはあら



モスク入口にいたウラマー

ゆる人に開かれています。モスクは休息の場所でもあり、異教徒間の相互理解を深める場所でもあります」
老人の風貌は深い教養がにじみ出るような威厳があり、まなざしは鋭い。

「あなたはモスクの管理人ですか」
「私は近くのマドラサ（イスラーム神学校）で教鞭をとっています。時にはモスクを訪れる方々の相談にも乗っています」

ザイトゥーナ・モスク付属のマド

ラサは創設以来、アラブやアフリカ各地から学生が集まるイスラーム世界を代表する学問の中心地であり続け、何世紀にもわたり多くの著名人を輩出してきた。

イスラームにはキリスト教の牧師や仏教の僧侶のような聖職者はいない。伝統的な宗教知の担い手としてウラマーというイスラーム法学者が、クルアーンや預言者の言行録であるハディースの解釈を通じて人々を導く役割を担っている。マドラサの教授はほとんどがこのウラマーである。

ウラマーは完全な俗人といっていない。キリスト教でも仏教でも、聖職者になるには、生涯独身を守る誓いを行ったり、剃髪し修行をしたりする。ウラマーは妻帯もするし、俗人と比べて何か特別な行動が求められるわけではない。必要なのはイスラ

ームに関する深い知識で、そのためにはマドラサなどで優れた指導者を得て、長い勉強期間が必要とされる。「あなたは旅行者ですか。どちらから来られましたか」

「私は日本からチュニジアの観光に来ました。二週間ほどチュニジア各地を訪問してきましたが、明後日には帰国します」

「そうですね。クルアーンは、旅人は丁重にもてなすようにと説いています。チュニジアの旅が良い旅であることを祈ります」

老人はかすかな笑みを浮かべ、軽く頭を下げると礼拝室の奥の方に去っていった。

イスラーム法学では、異教徒がモスクの中に立ち入ることについていろいろな解釈があるようだ。スンニ派には四つの派があるが、トルコな

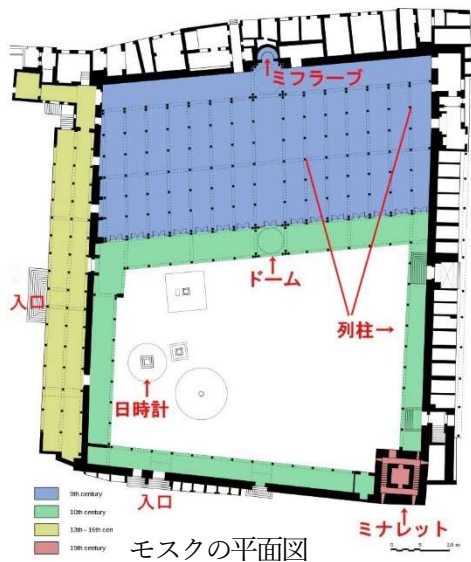
どに多いハナフィー派は全く自由と
しているのに対し、マグレブに勢力
を持つマーリク派は全面禁止、その
中間がハンバル派とシャフィーイー
派でムスリムが認めれば出入りでき
るとしている。禁酒に対して狂った
ように厳しいシーア派のイランでも
モスクへの出入りは寛容で、外国人
訪問客の観光の目玉になっている。

北アフリカに属するチュニジアで
は一般的にマーリク派の勢力が強い
ので、ガイドブックなどには観光客
は立ち入れないという記述がなされ
ているのだろう。

六月のチュニジアの陽は長い。日
没後の礼拝までにはまだしばらく時
間がありそうである。威厳にあふれ
たウラマーらしき老人に勧められた
のだから、中を見て回ることにもは
や何の遠慮もない。

しかし中に入る前にこのモスクの
平面プランを確認しておこう。左図
はジトウーナ・モスクの平面図であ
る。ご覧のように正確な四辺形では
なく、少し歪んでいる。水色の部分
がアグラブ朝時代に建てられた礼拝
室の部分である。ここは天井に覆わ
れている。

礼拝室は四辺を壁で囲われている
が、メッカの方向をキブラといい、
全世界のモスクは中軸線がメッカの
方角、すなわちキブラと一致するよ



モスクの平面図

うに建てられている。預言者ムハン
マドは当初はエルサレムの方角に向
って礼拝することを決めたが、神の
啓示によってメッカのカーバ神殿に
向って礼拝することにしたという。

従ってキブラがどの方角かはイス
ラームにとって重要な問題である。
エミレーツ航空の座席前のモニター
にはキブラが常に表示されていた。
キブラのおかげで測地学が発達した
ともいわれる。この図では上部の壁
がキブラである。キブラの目印とし
て、礼拝室の最奥の壁にはミフラー
ブが設けられる。

モスクにとってこれほど重要なキ
ブラ、すなわちメッカの方角である
が、メデイナの地図で見る限り、ど
うも正確にメッカの方を示している
とは思えない。私の持っているセイ
コーのプロトレックという多機能時

計は方位が図れる。スマホのグーグルマップでメッカの方角を確認したところ、ジトゥーナ・モスクのキブラの方角は南に三十度近くもずれている。

いまから千年以上前に建てられたのだから、正確な方位が分からなかったとしても無理はない。しかし、ここに礼拝に来るメディナの人たちはこの事実を知っているのだろうか。

黒い点で示されているのは一本一本の列柱である。私が数えたわけではないが、回廊部分も含めて全部で一八六本あるという。この列柱は近くのカルタゴ遺跡から運んできて、流用したものである。回廊の柱を見ると、柱頭に葉飾りがあるコリント式であることが分かる。

さて、それでは中に入ってみよう。白い大理石の柱が整然と並んでいる。



カルタゴ遺跡・アントニウスの浴場

柱はほとんど等間隔であるが、キブラ壁際の横列とミフラーブ真正面の縦列だけは少しスパンが広い。ミフラーブ真正面の列の入口と最奥の天井はドームになっている。ドームは

十世紀に増築されたものだが、チュニスでもっとも美しいドームといわれている。

床には一面にゴザがひかれている。ゴザには一人ひとりの礼拝スペースを示すようにミフラーブの形を模したアーチ状の模様がつけられており、アーチの先端はキブラの方向を向いている。

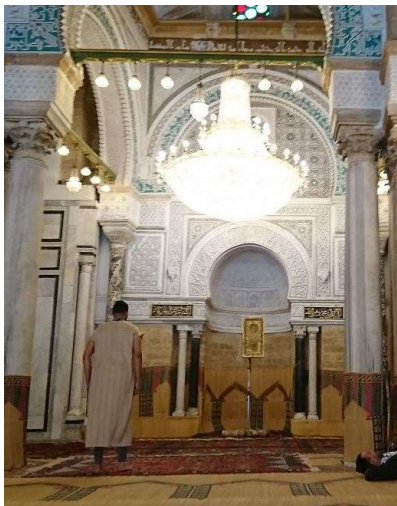
まだ日没後の礼拝の時間までは少し間があるので、礼拝者の姿はまばらである。礼拝者たちは敬虔な面持ちでミフラーブと向き合っていると、思いきや、柱に寄りかかって居眠りする人もいるし笑顔で談笑している人もいる。中には完全に横になって、手枕で寝ている人さえいる。緊張した雰囲気はどこにもない。ひとりだけミフラーブの前で、立位と、体を折って頭と両肘を床につける動作を



列柱が並ぶ礼拝室

繰り返し、熱心に祈りをささげている礼拝者がいた。

イスラームの祈りというものは、ひたすら神を畏れ敬い、忠誠を誓うものである。まず彼らは、アラビア



ミフラブの前で祈る人

語で「ラーイラーハ、イッラッラーフ、ムハンマドゥンラスールッラーヒ」と唱える。韻を踏んでいるので、耳に心地よい。「アッラーのほかには神はない。ムハンマドはアッラーの使徒である」という意味である。これはイスラームのもっとも重要な教義の一つであり、この信仰告白はムスリムに課せられた一番重要な義務である。

彼らは日本人が神社で神に祈るように「健康長寿」だとか「家内安全」などと決して言わない。神にお願い



美しいタイルで装飾されたミナレット

事をするなどということはもってのほかなのだ。それは神を使役することに他ならない。

飾り気が少ない礼拝室であるが、ミフラブは礼拝室の中で一番重要な場所で、アーチ状の窪みの形をしていることが多く、色鮮やかなタイルやアラビア文字などの手の込んだ

装飾が施されている。ミフラーブの前の柱列だけは大きく豪華なシャンデリアが天井から下がっている。

ミフラーブは重要であるが、それ自体が神聖なものであるわけではない。キリスト教会の十字架や仏教寺院の仏像のような聖なる礼拝の対象はモスクにはない。

ミフラーブは単に「方向」を示すための目印に過ぎない。祈る人の右わきで、手枕をして寝そべっている人が目につくだろう。

彫刻や絵画が豊富なキリスト教会や仏像が鎮座する仏教寺院と違って、モスクの礼拝室は素っ気ない。反復する柱列のリズムと幾何学的な整然さがイスラームというものの性格を反映したものであることは間違いない。

誤解を恐れずに言えば、イスラーム



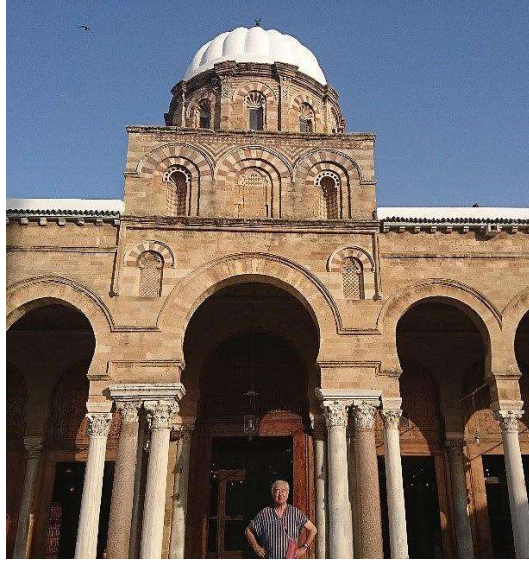
ムの教えというものはきわめて単純である。アラームは唯一の神でありムハンマドは預言者であるということを受け入れることがイスラームのすべてだといっても過言ではない。

イエス・キリストは神であるか人間であるか、その両方の性質を持っているのか、などといった紛らわしい解釈を必要としない。ムハンマドは「飯を食い、市場を歩いただけの人間」なのだ。

仏に近づくために、僧侶という仲介者を必要としたり、おどろおどろしい秘儀を必要としたりする仏教のわずらわしさもない。

ユダヤ教やキリスト教、仏教などに比べれば歴史的に新しいイスラームはそれなりに合理的で、整然とした幾何学的単純さが似合うのである。外に出ると、中庭にミナレットの影が長く尾を引いている。隅の手洗い場では数人の男たちが手足を洗ったり、口をすすいだりしている。もうすぐ日没後の礼拝が始まるのだろうか。

私も彼らと一緒に礼拝の真似事でもしてみようかと思った。アラブ風の長衣、ガラベージャを着ているし、ムスリムと思われないこともない。しかし真剣に神と向き合っている人たちに交じって、偽信徒がうその信仰告白などしたら天罰が下りかねない。おとなしく宿に帰ることにした。



メデイナの住宅街

メデイナにはスークのような商業

地区だけではなく、当然のことながら一般の住宅街がその周辺を取り囲むように広がっている。今日はその住宅街をひとりであらゆる歩いている。

住宅街は店舗が並ぶ主要な通路から枝分かれする路地に入り込めばよい。地図は毛細血管のような細かい路地をとっても描き切れないから、案内には役に立たない。大雑把なイラストのようなものだ。足の向くまま気の向くままゆっくり歩いてみることにする。

店舗が並ぶ商店街（スーク）の街路は人通りも多く、人々の話声や客を呼び込む声で騒がしいが、一步横道にそれると、先ほどまでの喧騒はどこへやら、静寂な空間が広がっている。

メデイナの主要な通路は道幅が二



住宅街の路地は狭い

間ほどであったが、そこから枝分かれした脇道の路地はその半分の約一間である。たいていが石畳で舗装されており、両側には二階建て、時として三階建ての住宅が隙間なく並んでいるから視界は狭い。

その上、路地は微妙に曲がっている。路地が直角に曲がっているのであれば、どちらの方向に何回曲がったかを記憶していれば、自分が進んでいる方向は容易にわかる。しかし少しずつ右に左に曲がっていると、つついの方角を失いやすい。だからよそ者にとってメデイナの路地は一



ブーゲンビリアの花が白壁に映える

種の迷路のようなものだと言われる。
 メディナの迷路性について説明するとき、よく言われるのは、敵の侵入を防ぐためには迷路状の方が都合がよいからというものだ。侵入した敵は方向感覚を失い、勢いを止めることができるという理屈だ。
 日本の城下町などでは出入り口に、道を二度直角に曲げた「枳形」あるいは「鍵の手」などと呼ばれるものを造った。これは敵の視界を防ぎ、

侵入しにくくする目的で造られた。

かつての甲州街道（現在は城東通り）は、甲府城下に入る手前に「金手」という道が二度直角に曲がる場所があつて、いまでも「かねんて」という地名と地形が残っている。

しかしメディナの路地は、私が見たかぎりどう見ても敵の侵入を防ぐのに役立つようには思えない。街の防御性が高まるというのは理屈に合っているように見えるが、こうした実利的な解釈というか、機能的な解釈は現代人が考えたもので、メディナの成立の歴史を考えれば真実からはほど遠いのではないだろうか。

チュニスのメディナの建設が始まったのは八世紀の初めである。街の中心にいち早くジトゥーナ・モスクが建てられ、街のシンボルになった。礼拝に集まってくる人たちを目当て



に、モスクを取り巻くように商店ができる。するとそれを目当てにまた人が集まる。
 このようにして自然発生的に街は拡大してゆき、住居も増えていった。

人々は同族意識を持った部族同士や
同じ業種の商売をする人たちが一定
の場所に固まって住んだに違いない。

当初は広い土地がいくらでも得ら
れたのだ。人々は沙漠に幕営するよ
うに部族ごとに固まって住居街を構
成していった。人口が増えるに従い、
住居街と住居街の間の空き地を住居
が埋めて行き、やがてそれらを結ぶ
通路が整備された。

微妙に曲がった路地は、このよう
に自然発生的にできてきたと私は考
えたい。チュニスのメディナが形作
られ始めた八世紀は、日本でいえば
藤原京から平城京の時代である。日
本では中国に倣った律令制のもとで、
強力な官僚たちが街づくりの音頭を
取り、直線的な道路と四角の区画割
を整備していった。しかし故地から
遠く離れ、マグレブの一角に侵入し

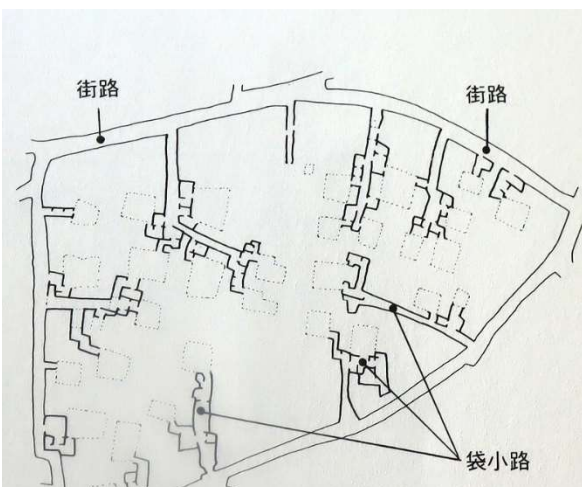


てきたアラブ・イスラームは、軍事
には強くても、きちんとした官僚機
構を整備するまでには至っていなか
ったように思える。

路地の微妙なカーブとともにメデ
ィナの路地を迷路たらしめているも
う一つの要因は記号（サイン）が少
ないという点である。道路標識とか
地名表示板、看板、信号などが極端
に少ない。何らかの記号があるだけ
で、街の迷路性はかなり解消される
と思う。もっとも毎日通いなれてい
る地元住民にとっては必要ないも
のかもしれない。

たくさんある袋小路も迷路性を高
めている要因だ。狭い路地だが何と
なく雰囲気がありそうだと思って侵
入すると、行き止まりになってしま
ったことが何回もある。地元の住民
には、どの路地が行き止まりか頭
に入っているから問題ないのだろうが、
初めて街歩きをする者にとっては迷
惑である。

そんなに奥が深い行き止まりでは
なく、せいぜい二十メートルから三



袋小路（地中海のイスラム空間・丸善）より

十メートルで行き止まりになるので、諦めて引き返せばよいのだが、「この先行き止まり」の標識を掲げておいてほしいところである。

袋小路は最初からあったわけではなく、都市化が進むにつれて土地が分割されたり、大家族が分家したりしてできたことが想像できる。一般的に比べて袋小路はパブリックな路地に比べて狭いので、慣れてくるとなんとなく分かるようになる。

迷路性と並んでもう一つのメディアナの住宅街の特徴は、建物の壁が路地ぎりぎりのところで両側に立ち上がっていることである。つまり自分の所有する敷地の境界線にそって住宅が建っていることになる。

日本の民法では、建物を建てるときには境界線から五十センチ以上の距離を取らなければならないと規定



建物は境界線ぎりぎりに建てられ、窓の位置は高い

されている（民法二三四条）。これは道路に面する境界にも隣の家との境界線にも適用される。

次の写真は筆者がかつて住んでいた東京中野の住宅街であるが、路地



雑然とした東京の路地

に面した家々は路地との間にスペースがある。そしてこのスペースには自転車や鉢植え、冷蔵庫らしきものまで置いてあって生活感にあふれている。雑然としていることこの上ない。さらに路地に面して窓が大きく開かれているから、茶碗を洗う音や

夫婦喧嘩の声まで聞こえて来そうである。

これに比べれば、メディナの住宅街の路地がいかにつきりしているかわかる。隣の家との間に隙間がないことも景観をすっきりさせる要因だ。隣同士で壁を共有している場合さえある。逆説的にいえば、メディナの路地の美しさは両側に立ちふさがる住居にあるといえる。路地に浴びて隙間なく並ぶ白い石灰の壁は、その連続性によって美しいリズムを作り出している。途中に異質な建物があったり、空き地になったりしてしまったり路地の風景の均衡はたちまち崩れる。白い歯並びの中に金歯が一本入るだけで、顔つきが変わってしまうのと同じである。

メディナの路地を美しくしているもう一つの要因は、おしゃれな窓や



草模様の鉄格子の窓

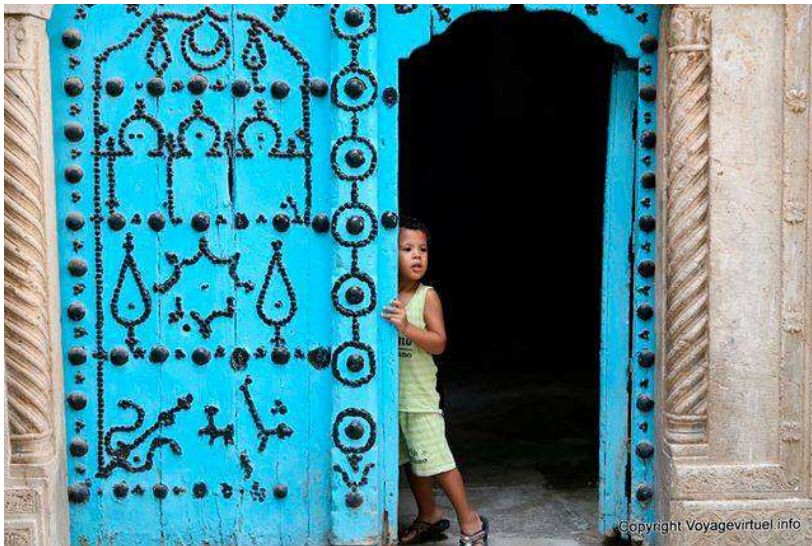
出入口の扉である。窓の位置を見てほしい。ほとんどの窓は人間の頭より高い位置に設置されている。しかも頑丈な草模様のアイアンワークの格子がはまっている。これは通

りから家の中は見えないが、家の中からは通りが見えるようにするためである。路地を挟んで向かい合う家では窓の位置をずらして、互いに中を覗き込まれないよう配慮している。白い壁に青く塗られた格子窓が目

に心地よいし、赤いブーゲンビリアの鉢植えなどが窓を飾っていると思わず「絵になるな」とつぶやきたくなる。

一般的にアラブリースラムの建築では、外面をあまり重視しないが、単調になりがちな路地のなかで個性





を演出しているのは、ドアやドア枠
 周りである。玄関の戸口には厚い頑
 丈な板で造ったドアが取り付けられ
 ているが、個性的な細工や色彩を施
 し、自己表現をしているものが多い。
 ドアの飾り細工は繊細で、洗練され
 ている。ボルトの頭で様々なパター
 ンを描く手法が独特の雰囲気醸し
 出している。

路地にアクセントをつけているも
 う一つの要素は、路地をまたぐよう
 に設けられた部屋である。古いもの
 から新しいものまで、路地の至る所
 にある。路地の両側の敷地が同じ所
 有者なのだろうか。部屋の下はアー
 チ状のトンネルになっている。

隙間なく住宅が建ち並ぶメディナ
 では増築は容易ではない。二階建て
 の住居が大半なので、三階建てにす
 るのは何らかの規制があるのかもし

れない。増築の可能性のある空間は
 路地の上だけなのであろう。娘が思
 春期になって自分の部屋が欲しいと
 か、寝室を拡張したいとか、増築す
 る理由はいろいろある。この路地上
 の部屋のいいところは窓から路地の
 眺めがよいという点である。ふつう
 は路地に面した窓からは路地を挟ん
 だ隣家の壁しか見えない。



路地にアーチ状のトンネルを造り、その上に部屋を建築する



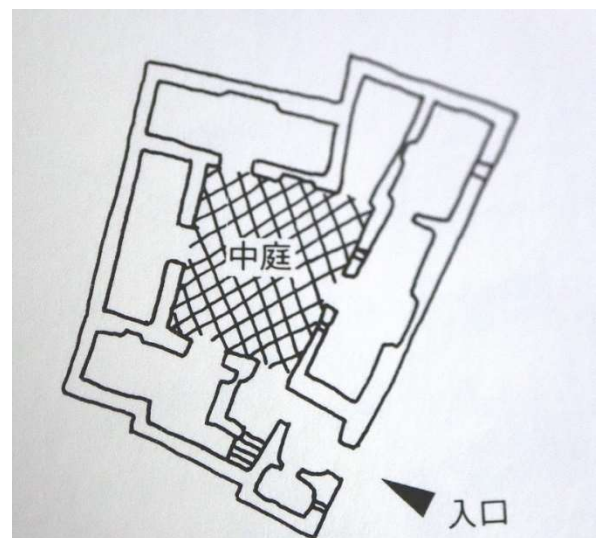
日本でもこのような道路をまたぐ建築がないことはないが、公共性の高い場合に限られる。法律的にかなり面倒な手続きが必要になるだろう。メデイナの路地を歩くのは楽しい。路地が微妙に曲がっていて先がすべて見通せないのも良い。次の角を曲がったら何があるか、想像しながら

歩くのが楽しいのだ。

私は旅を通じていくつもの素敵な街と出会ってきたが、良い街の条件というのは路地が楽しい街であると断言できる。素敵な街路や路地を持つていない町は愛想がない。

住宅街の散策は路地を歩き回るだけで十分楽しいが、やはり住宅の中を覗いてみたい。ほとんどの住宅は四囲を壁で囲み、真ん中に中庭を置く。そして各居室はこの中庭に向かって開かれている。中庭こそアラブ・イスラームの建築のキモなのである。こうすることでパブリックの間とプライベートの空間を明確に分けているのである。だから外から中をうかがうことはきわめておずかしいが、観光客が勝手に住居の中に入るわけにはいかない。

最初は通りがかりの若者を掴まえ



て、頼んでみようと考えた。若者なら英語が通じるかもしれない。しかし行きずりの老人に突然家の中を見せてくれと言われたら、ほとんどの人がしり込みするだろう。この作戦はうまくいくとは思えなかった。

たまたま出入り口の鍵を開けているところにも出会ったが、言葉が通じないのだから、中庭を拝見させてくださいと申し出ることもできない。これなら何とかかなりそうだと思え

典型的な中庭式住居(地中海のイスラム空間) より

たのは、茶店にたむろしている男たちの中で、自宅を見せてくれる人を探すという作戦だ。たいがいの男は時間を持てあまし、茶店で暇つぶしをしているように見える。

ガイドを引き受けてくれたファーマティマさんなどは「チュニジアの特徴は男たちが茶店で毎日のようにだべっていて働かないこと」と愚痴っていた。退屈している男たちなら助け舟を出してくれるかもしれない。中には英語が分かる人もいるだろう。茶店なら五分も戻れば、通り沿いに何軒もある。実はこの作戦が見事に当たったのである。茶店の前で中を覗き込んでみると、数人の年寄りグループが私を手招きした。その中の一人が、隣のテーブルの椅子を自分の脇に引き寄せると、「どうぞお座りください」と言った。



退職者仲間でお茶を楽しむ老人グループ

ベンナンさんというこの老人は、いまは退職しているが、専門学校の英語の先生をしていたという。日本人かと聞くので肯くと、「日本は金持ちだ。チュニジアを助けてくれ」

と話し始めた。間近にチュニスで開かれるアフリカ開発会議（TICA D）のことを教師の退職者仲間と話題にしていたのだという。

新型コロナウイルスの影響で観光業が主要産業のひとつであるチュニジアでは経済が悪化し、二〇二〇年のGDP成長率はマイナス9%を記録した。感染状況が沈静化する中、観光客も少しずつ戻りつつあるが、新型コロナウイルス禍前のレベルまで回復するには至っていない。

失業率は新型コロナウイルス禍でさらに悪化し、二十四歳以下の若年層の失業率は40%を超えるという。公務員の退職年金が減らされるかもしれないと議論になっていたのだという。「サイード大統領の政治はどうですか。議会を解散してしまっただけですね」

日本の経済援助をもっと増やしてくれと言うベンナンさんの言葉を「帰ったら総理大臣に伝えておく」と冗談で軽くないなし、混乱が続く政治状況について聞いてみた。

ベンナンさんは嬉しそうに仲間を声をかけると、あちこちで声が上がった。ベンナンさんの解説によると、大統領支持が多いそうだ。

「彼は学者だよ。政治的な男ではないな。少なくとも汚いにおいはしない。やり方に批判はあるが、腐った政治家どもを片付けるには仕方ないだろう」

チュニジアは二〇一一年、反政府デモに端を発した「ジャスミン革命」で独裁政権を覆し、「アラブの春」の起点になった。政治の民主化が期待されたが政治は混乱し、経済や治安が悪化する中で、二〇一九年に現

在のサイド大統領が就任した。ふたたび大統領による強権政治が行われることへの庶民の反感はないのだろうか。

「腐敗した民主主義より、きれいな



私の隣で野球帽をかぶっているのがベンアリさん

独裁政治の方が良いということだよ」

ベンアリさんは両手を広げて呟いた。七月には大統領権限を強化した憲法改正に関する国民投票が実施されるが、恐らく多数の賛成を得られるだろうとベンアリさんは言う。

（帰国後の七月二十五日に行われた国民投票は、投票率30%と低かったが、約95%の賛成を得た）

政治の話になると議論が白熱するのは日本もチュニジアも同じである。老人たちは身振り手振りを交えて口角泡を飛ばしている。あちこちの茶店でこういう状況をよく見かけるが、酒も飲まずによく長々と話し込んでいられるなとも思う。

仲間同士の議論が始まると私には中身はさっぱりわからない。そろそろ目的の中庭探索を持ち出してみようとベンアリさんの袖を引いた。

「わたしはマグレブの住宅建築に関心を持っています。とくに住宅の中庭の構造を勉強したいのですが、機会が得られません。どなたかご自宅の中庭を見せてくださる方はいらっしゃらないでしょうか」

話を聞き終えたベンアリさんは即座に「俺の家を見てくれ」と応えてくれた。ベンアリさんが仲間にもこの話をする、さらに数人の老人が、自分の家もどうぞと申し出てくれた。なおも茶飲み話を続ける仲間たちにあいさつすると、ベンアリさんは私が昨日歩いたジトゥーナ通りをカスバの方に向かって歩き始めた。この辺では顔が売れているらしく、気軽に両脇の商店主らしき男に声をかけたりかけられたりしている。

「チュニジアでは英語教育は盛んなんですか」

英語の教師だったというので、並んで歩きながらベンアリさんに聞いてみた。

「チュニジアでは六歳から十六歳まで九年間の無償の義務教育があります。小学校三年生からは第一外国語のフランス語、小学校六年生からは第二外国語の英語の授業も始まりません」

「フランス語はほとんどの人が話しますけど、英語は少ないですね」

「最近の若い人は英語をしゃべる人が増えてきていますよ。私は私立の英語学校の教師でしたが、チュニスだけで十校以上の英語学校があります。若者たちは英語のインターネット・サーフィンを楽しんでいますよ」

チュニジアは天然資源が少なく、国家戦略として教育に力を入れていくようだ。就学率はほぼ百パーセン



犬は不浄、猫は清潔な動物

トである。最近では小学校レベルからコンピュータ授業が広く導入されるようになり、高いスキルを持ったコンピュータ技術者が育ってくることが期待されている。

ベンアリさんはもうすぐカスバ広場の手前の路地を右折し、閑静な住宅街に入ってゆく。チュニスでも山

の手は高級住宅街らしい。スークの喧騒からはすでに遠い。

気になったのはいたるところに悠然と闊歩する猫たちの群れだ。イスラーム圏では猫が大事にされるといふことは知っていたが、チュニスのメディナは異常なくらい猫が多い。猫たちはいずれも丸々と太っているから、大切にされていることが分かる。レストランに入ってきてテーブルの周りをうろついても誰も追いつめない。それどころか自分の食べているものを分け与えている。

これに比べて一度も見かけないのは犬だ。猫と犬の待遇の差は歴然としている。ベンアリさん曰く、「犬は不浄だが猫は清潔」と予言者ムハンマドの言行録ハディースに書いてあるそうだ。

茶店から話をしながらゆっくり歩



石畳が美しい

いて五分ほどで、ベンアリさんは路地に面した大きな扉の前で立ち止まると、ポケットから鍵束を取り出した。家族みんな出かけていて、いま家には誰もいないという。

大きな扉を押し開いて中に入る。入口はクラック状になっていて路地から直接、中を覗けないようになっていている。クラックを曲がるとすぐそこが中庭だった。路地との間には三十センチほどの段差があるが、日本

の玄関に当たるような部屋はない。

下の写真は入口の扉に背中を押し付けるようにして撮ったものだ。決して広い庭ではない。おそらく十畳間程度の広さだろう。

「きれいな中庭ですね」

私が想像していたよりもはるかに整然としている。床面がすべてタイルでおおわれていて地面が一切見えないのはジトゥーナ・モスクやエル・アッターリンというレストランの庭と同じである。四囲が壁で囲われているが、空からの採光と白い壁で明るい。囲われた場所にもかかわらず開放感があるのは空に向かって開かれていくからだろう。

「突き当りが婆さんの部屋、左が台所とダイニング、それにバスルーム。二回は私たち夫婦の居間と寝室、それに娘の部屋がある。私は趣味で彫



ベンアリさんの居宅の中庭

金をやっているが、その作業部屋もある」

写真には写っていないが右手に二階への階段がある。左手のダイニングは扉をあげ放てば、中庭と一体の空間になる。大きな木製のダイニングテーブルが置いてあった。右の壁際に見えるたたみ二畳ほどの池は深さが十センチほどで浅い。水と緑を

何より貴重に考えるアラブロイスラ

ーム文化の片鱗がここにもみられる。

名著の誉れ高い『街並みの美学』

でいち早く都市景観の重要性を述べ

た建築家・芦原義信はこのような

「小さな空間」は「静寂であり、創

造的であり、詩的であり、人間的で

ある」と指摘している。それは「大

都市の雑踏が匿名的であり、喧騒で

あり現実的であり、非人間的である

ことと対比される」のである。

「ほとんどの家が中庭を持っていま

すよ。中庭は私たちの家で一番重要

なんです。お客さんがくればここで

接客するし、祝い事があれば宴会も

します。ラマダン明けのイード（祝

祭）のときは息子一家もやって来て、

ここで一緒に食事しましたよ」

中庭は住居の中での動線のかなめ

であり、各居室へは中庭を介して出

入りする。内部と外部を繋ぎ、さら

に内部の部屋と部屋の間に設けられ

た緩衝地帯、いわゆるバッファーで

ある。この中庭は父親が亡くなった

二十年ほど前に、ベンアリさんが考

え、手を加えたものだという。

「イスラーム法では、道端の処理の

仕方、窓と通路側の視線の関係、通

りの中庭の関係などについて細かい

規則が設けられています。しかし家

の内部の空間、中庭をどうするかは

完全に個人の自由です」

日本の庭は自然を模して造られる。

池には自然石を配置し、曲線を多用

する。山を模して築山を作り、岩や

砂を置いてそこから流れ落ちる水を

イメージする。そして家の中に居な

がら、このような疑似自然が眺めら

れるようになっていく。

日本では自然を家の中に引き込ん



でいるといつてよい。兼好法師が徒然草で述べたように、春の若草、夏の夕涼み、秋の名月、冬の雪に親しむ家と庭こそが家づくりの基本なのだ。

このような家と庭は豊かな自然に恵まれ、自然をいとおしむ日本人ならではの発想なのだろう。ジトゥーナ・モスクのところでも述べたが、できるだけ自然を排除すること、自然から自らを切り離そうとすること

はアラブに厳しい自然環境を見れば納得できる。

もう一つは気になったのは、ベンアリさん一家にとって、この中庭は「うち」なのか「そと」なのかという点である。居室にはバスルームが備わっているという。部屋と中庭を区切る壁やドアは厚く頑丈だ。居室の扉を閉めて鍵をかければ中庭は「そと」になる。だから中庭では靴を履いている。

しかし路地に面した扉を閉めて鍵をかければ、中庭は「うち」になる。暑い夏の夜は中庭にベッドを置いて、そこで寝ることもあるという。つまり中庭形式の家屋の優れた点は家族を構成する一人ひとりの独立性、プライバシーが確保されるという点ではないだろうか。

哲学者・和辻哲郎は名著『風土』

の中で、モンsoon型・沙漠型・牧場型の三類型の風土を設定し、世界各地の民族・文化・社会の特質を見事に浮彫りにしたが、その中で、「日本人は家を「うち」として把握している。家の外の世間が「そと」である。そしてその「うち」においては個人の区別は消滅する」と、日本家屋の特徴を述べている。

最近の日本の住宅は個室化が進んでいるといわれるが、わが家などはふすまを開け放せば家全体が見渡せる。家族は「うちのもん」であり、プライバシー意識はきわめて希薄である。家のあり方は人間のあり方も深く関係せざるを得ないのだ。

ベンアリさんが、友人がこの近くでゲストハウスを経営しているので、その内部も見に行こうと誘ってくれた。ゲストハウスの名前は「コート



ゲストハウス・コートヤード

ヤード・ゲストハウス」。まさしく中庭が美しいゲストハウスである。写真は三階の廊下から撮ったものである。二階に客室が六室、一階は食堂や談話室などの共有部分である。

二階は中庭を取り囲むように吹きさらしの回廊が設けられており、木製の手すりが連続するリズムを作り出し、ところどころに置かれた緑の観葉植物が心を和ませてくれる。中庭や回廊から部屋に直接出入りできる構造がゲストハウスという使用目的にマッチしているのだ。

ベンアリさんの親切な案内で、メディナの住居には、外の路地を歩いていただけでは分からない豊かな内部空間があることが分かった。彼がかつて政治家や貴族、裕福な商人などが住んでいた華やかな邸宅がメディナにはまだいくつか残っており、それらもぜひ見ておくべきだと勧めてくれた。しかしこれらの歴史的遺産に指定されているような建物は、コロナ禍の影響もあって閉鎖しているか改築中のところがほとんどだった。

た。ベンアリさんのおかげで一般住宅の中庭構造を見学できたことは大きな収穫だった。人間は床、壁、天井によって外部空間から切り離された内部空間を持つ「家」を造るが、そのやり方は歴史や文化、いわゆる風土によって大きな違いがある。

四囲を高い壁に囲まれ、中庭を持つチュニスのメディナの住宅は強い日差しと乾燥に適している。石を積み白い石灰を塗った壁は、厚く断熱効果が高い。

これに比べ日本の住居は木と竹と紙で造られ、柱と柱の間には大きな開口部がある。開口部はあけ放てば風が通り、湿気を外に逃がす効果がある。雨が多く湿気の高い風土に合った構造なのである。

さて、今日はメディナ散策最後の

日である。コロナ禍で乗客が集まらなかつたのか、エミレーツ航空は私が予約していたチュニス〜ドバイ間のフライトをキャンセルし、二日後のフライトを指定してきた。

三日間のチュニス滞在の予定が思いがけなく五日間に伸びたのである。日本へ帰っても急ぎの仕事があるわけではない。メデイナの散策をゆくりと楽しむことができた。四日間毎日メデイナのあちこちを歩き回り、いくつかのスークやモスク、マドラサ、それに住宅街を散策し、知り合いもできた。そんなメデイナ散策の最後は、ハمامで締めくくろうと決めていた。

ハمامは中東からマグレブ地方に見られるサウナ風の公衆浴場である。チュニジア三週間の旅の疲れと埃を落とし、旅の思い出をしっかり胸の

うちにしまい込んでおくのだ。私は昔からサウナが大好きで、自宅にも一坪ほどのサウナ室を備え、毎日のように入っている。

ハمامはメデイナのあちこちにあ



ハمام・エル・カシャシーンの入口

るが、個人の住宅に浴室が普及するにつれ、昔に比べると数が減ったという。街歩きをするときに何軒かのハمامをマークしておいたが、ジトウーナ・モスクのすぐ東側にあるハمام・エル・カシャシーンに行くことに決めた。

エル・カシャシーンはスークの前で、かつては古着を扱う商人たちが集まっていた。ハمامの名前はこのスーク名からとられたものだ。このハمامはムスリムたちがジトウーナ・モスクでの礼拝の前に身を清めるために通う伝統あるハمامである。

ハمامは日本の散髪屋の前にあるような三色の渦巻き模様のサインポールがあるのですぐわかる。散髪屋の発祥はエジプトにあるというのが定説なので、色は違うがサインポールもこの辺にルーツがあるのかもし

れない。ハمامは散髪屋を兼ねているところが多い。ハمام・エル・カシャシーンもその例に漏れず、入口は散髪屋になっている。というか散髪をする部屋を通り抜けないとハمامにたどり着けない。

二人の客がいたが、ちょうど手前の客の散髪が終わりそうだった。身振り手振りで料金を聞くと、ハディナール（三四〇円）だという。髪も伸びていたし、私も入浴前に切ってもらうことにした。

ここでアラブ・イスラーム世界のハمامになじみがない方のために、ハمامのなんたるかを解説をしておく。ハمامの語源は「温める」「熱する」を意味するアラビア語の動詞「ハンマ」が由来だそうだ。ハمامの歴史は古く、元々はローマの公衆浴場がそのルーツだ。オスマントル

コが東ローマ帝国を征服したことで、ローマ人の浴場文化を引き継ぎ、発展させたものだ。

イスラーム教は清潔を重んじることは前に述べたが、ムスリムたち



にハمامの文化は好んで取り入れられた。かつてハمامはモスク、マドラサ（神学校）に次いでメディナで重要な施設だと考えられていた。

またハمامはイスラームの寄進制度（ワクフ）によって運営されていることが多い。ワクフとは、イスラーム教徒に課された五つの宗教的義務（信仰告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼）の一つである喜捨（ザカート）に基づく寄進行為である。富めるものは何らかの財産を基金として供出し、そこからあがる収益を慈善目的のために利用することを約束する。

ワクフによって建てられたハمامは、そこから上がる収益をモスクやマドラサの維持管理費に充てたり、そこで教鞭をとるウラマーの給料に充てたりするのである。ジトウーナ・モスクがどんなワクフによって

運営されているのか知らないが、このハマムのワクフが利用されている可能性はある。『都市の文明イスラーム・講談社現代新書』にあるワクフの解説を以下に引用させていただく。

「イスラーム世界の都市には、市長もいなければ市役所もない。権力が都市の秩序を維持したのではなかった。制度化された、閉鎖的な自治組織が都市を維持したのではなかった。さまざまなワクフが維持したのである。そしてワクフによって維持された施設は、特定の「市民」だけが利用したのではなく、誰でもが自由に利用できる」

髪を切り、髭を剃ってさっぱりしたところで、いよいよ蒸し風呂に入る番である。近くに住む常連客はバケツに入浴道具一式を入れてやって

くるが、私が出ているのは首に下げたタオルだけである。

散髪屋の奥の扉をくぐると入口左手に銭湯の番台のようなものが出て、そこに東野栄次郎演ずる水戸黄門みたいな老人がいた。

いくら払えばよいのか分からないので、手のひらにあるだけの硬貨を載せて差し出すと、黄門様は五ディナールをつまみ取った。この部屋は脱衣をする部屋であり、蒸し風呂を出た人たちが体を休めたり、談笑したりする場所でもある。いわば庶民の社交の場といったところである。

部屋の真ん中に室内噴水があったが、水は出ていない。水の流れるインターネットはハマムの雰囲気づくりに最適だと思うが、故障しているのか長いこと使われていないようだった。部屋全体が少しくたびれた感じで、



ハマムの脱衣室兼休憩室

改築はされているのだが古さは否めない。五ディナール（二一〇円）だから贅沢なことはいえない。私はトルコのイスタンブールでア

ラブの王侯貴族が入りにやってくるというジャーロール・ハمامという超豪華なハمامに行ったことがある。壁や天井は彩釉タイルや大理石で装飾され、きれいな温水が惜しげもなく流れていたが、百ユーロも取られた。私には五ディナールのハمامの方が似合っている。

スマホや腕時計などの貴重品は黄門様が預かってくれる。脱いだ靴と服を置いておく場所が、入浴後にくつろぐ場所にもなるので、適当な場所を見計らって腰を下ろし、服を脱ぐ。私の場合は下着の上に頭からすっぽりかぶるアラブ風の冠頭衣・ガラベeyaを着ているだけだから、簡単である。

ハمامは日本の銭湯と違って、真っ裸にはならない。陰部を隠す腰巻かパンツのようなものを身に着けて



いなければならぬ。私は履いていたパンツをそのまま使用した。脱衣室にあるサンダルをつっかけ、まず第一室に入る。

この部屋はあまり暑くない。バケツが置いてあったので、お湯をかぶって体を慣らすための部屋かもしれない。バケツは共用のものか利用者個人のものか分からなかったので、

私は蛇口からのお湯を手ですくって、頭に振りかけるようにした。

掃除をしているおやじの奥が第二室である。この部屋の温度は恐らく五十度程度。左手に体を洗う個室ブースが四つある。石鹸やシャンプーは置いていない。自分で持参するのだろう。大きな蛇口をひねると勢いよく温水が出てきた。

部屋の真ん中に三畳分ほどの大理石の台がある。また部屋右手にも同じ高さの大理石の台がある。ここに座ったり寝転んだりして発汗するまで体を温めるのだろうか、五十度程度ではすぐには汗が出てこない。写真中央にさらに奥の部屋に通じるアーチ状の入口があるが、とりあえず一番奥まで進んでみることにする。

一番奥の部屋はもう少し温度が上がっておそらく六十度程度で、蒸気

も濃くなってきた。スマホのレンズが曇ってしまい写真が撮りにくかったのと、先客が三人いたので撮影は遠慮した。



この奥の部屋には、五人程度が一度に入れる浴槽が二つあり、一つは四十数度の熱いお湯、もう一つは冷水が張られている。先客の男が交互に入れと身振り手振りで教えてくれた。温浴と冷浴を繰り返すことで血液の循環を促し、発汗を促すということだろう。

私のハمام遍歴によると、浴槽があるハمامは珍しい。イスラームの清潔感では、同じ浴槽につかることに抵抗感があるのかもしれない思っていた。熱い湯と冷たい水に交互に三回ほどつかることを繰り返しているうちに、ようやく汗が出てきた。

するとバケツとタオルを手にした落ちぶれたサダム・フセインのような男が現れ、手招きする。三助登場である。男は第二室の大理石の台の

上に私をうつぶせに寝かせると、私が洗車の時に使うようなスクラブミットでゴシゴシと背中をこすり始めた。

私は柔肌である。てのひらでそつとなでるぐらいなら良いが、大の男が力いっぱいこするのだから悲鳴をあげたくなるほど痛い。しかしこのくらいで弱音を吐いては日本男児の名が廃る。ひめゆり学徒の苦難を思えばこのぐらい何ともないと、必死に歯を食いしばって耐えた。

落ちぶれフセインは「どうだ、見てみる」というように、私の目の前にこすりとった大量の垢をかざす。蒸し風呂の中にいて湿った蒸気によって表皮の角質層が柔らかくなって、はがれやすくなったのだらう。

垢すりの次はマッサージである。上半身を起こさせ、頭をつかんで激

しく左右に曲げる、ひじをつかんで高く持ち上げ背中のように引く、脚を持ち上げエビ固めなどの連続技である。これには私も往生した。

私はもともと関節が硬く、万歳三唱するのにも正座をするのにも苦勞するほどである。マッサージは歩き疲れた脚の筋肉をもむことだけにさせた。

最後は頭からつま先まで石鹸をつけて入念に洗い、バケツに汲んだお湯を頭から勢いよくかけておしまいである。この間約三十分だったが、さすがにさっぱりした気分になった。

休憩室に戻り、大の字になって寝ころぶと、朝から歩き回った疲れが出たのであろうか、いつのまにかパンツひとつのままの姿で寝てしまった。

しばしのまどろみから目が覚めた

時には、メディナにはもう夕暮れが

迫っていた。商品を照らす明かりが輝きを増している。街路沿いの多くの店舗の店じまいは早い。まだ五時を少し過ぎたばかりだというのに、多くの商店は街路に陳列していた商品を店の中に取り込み始めている。中にはシャッターを下ろし始めている店もある。日中の人混みが嘘のように、通りは閑散としてくる。

こんなに店じまいが早いのは、フランス保護領時代に仕事嫌いのフランス人が持ち込んだ習慣なのかと思ったが、ファーターイマさんが言っていたメディナの門が夕方閉じられるという話を思い出した。

いまはメディナの内外を分ける門はなくなつたが、門が閉じられた時代の慣習が残っているのである。メディナもしばしの眠りにつくので

ある。

私はチュニスのメディナを歩き回りながら、町全体が一つの有機体のように感じられる瞬間が何度かあった。大きなモスクやマドラサは心臓や肺に例えられるだろう。スークは大動脈である。人の群れがはげしく行き来し、多様な商品が持ち込まれ買われてゆく。

住宅街をびっしりと埋め尽くす庶民の家屋は細胞の集まりであり、それらを結ぶ狭い路地は無数に枝分かれする毛細血管である。すべてが混然としながらも、そこにははっきりとした「内的秩序」がある。

チュニスのメディナは車というものが普及する前の都市である。誰もが自分の足で歩いた時代の街である。だから人間の身の丈に合った街といってもよい。歩く人間や老人や子供

にやさしい街のだ。

世界中の都市が車中心の設計思想で計画され、画一化されつつあるいま、メディナはきわめて貴重な存在なのではないだろうか。



礼拝を終えた後、モスクの前で世間話に興じる老人たち

モザイクのような歴史

チュニジアは、多様な歴史と文化が混じり合った「モザイクのような歴史」を持つ国といわれる。こう呼ばれるのは、世界一のモザイクタイルの収蔵を誇るバルドー博物館からの類推だけではない。東西二五〇〇kmに及ぶ地中海のほぼ真ん中で、シチリア、サルディニアなどの島々と対峙した文明の交差点のような位置が、チュニジアにモザイクのように複雑で重層的な歴史をもたらした。たった三週間の旅で、このモザイクのすべてのピースを私が描くことは荷が重すぎる。だからチュニシスのメディナという一片のピースを取り出し、私が見たり聞いたり感じたりしたことを書いてきた。それはチュニスをはじめスース、マハーディア、カイラワンなどのメディナがあまり

にも印象深く、私に深い感銘を与えたからだ。しかしこの紀行を「チュニジア紀行」としながら、それではあまりにも片手落ちのそしりをまぬがれない。

チュニジアの旅のすばらしさを多くの方に知っていただくためには断



片的であるが、そのほかの訪問地についても簡単に触れておこう。チュニジアの旅のハイライトはメディナだけではない。

第一に、ローマ帝国がチュニジアを属州とした時代の素晴らしい遺跡がいくつも残されている。中でもカルタゴ、ドッガ、エル・ジェムなどの保存状態の良い遺跡はユネスコの世界遺産に指定され、チュニジア観光には欠かすことができない。

第二に、チュニジア南部の乾燥地帯にあるベルベル人たちが築いた奇妙な建築物は、建築というものがいかに風土に依存しているかを知ろうとて貴重だ。チュニジアの歴史を交えながら、これらについて紹介しよう。

文明の交差点に最初にやってきたのは、フェニキア人だ。彼らは交易

の富を背景にカルタゴという大帝國を築き上げる。しかし前九世紀から七〇〇年にわたって繁栄を謳歌したカルタゴは、三回のポエニ戦争を経てローマに完全に滅ぼされる。ローマ帝国はカルタゴの街を徹底的に破壊しつくし、植物が生えないようにその跡に塩までまいたという。

現在残る世界遺産のカルタゴ遺跡は紀元前一世紀ごろローマの植民市として建設されたものだ。典型的なローマ都市らしい円形劇場や浴場の跡が残されている。

地中海の制海権を手にしたローマ帝国は「ローマの穀倉」と呼ばれた豊かなチュニジア各地に植民市を建設していく。世界三番目の規模を誇るエル・ジェムの円形闘技場は収容人数三万五千人の規模を誇る。剣闘士どうしの戦い、猛獣対猛獣、猛獣

対人間の戦い、さらに戦車競走など、市民を熱狂させたといわれる。三階から見下ろすアリーナは圧巻である。保存状態がローマのコロッセウムより良く、今でも音楽祭などに使われている。

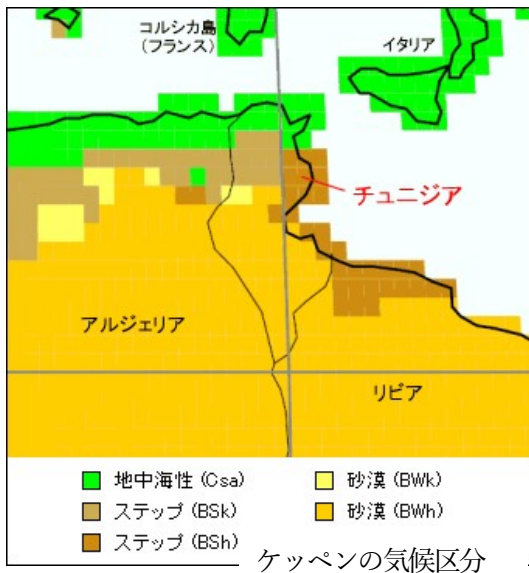


エル・ジェムの円形闘技場



ドゥッガ遺跡

次に紹介するのはチュニスの南西約一二〇kmにあるドゥッガ遺跡である。静かな田園地帯の丘陵の上に当時の劇場や神殿などが残されている。標高約六百メートルの遺跡から周辺を眺めると麦やオリーブの畑が広が



り、この一帯が豊かな穀倉地帯であることが実感できる。二〜四世紀には一万人の人口がいたという。ドゥッガ遺跡がどのような気候帯に属するのか、調べてみた。左図はチュニジの気候分布を示したものである。地中海に面したチュニスは、夏は乾燥して暑く、冬は雨が多く比較的温暖な地中海性気候である。その南は半乾燥地帯のステップ気候であるが、濃い茶色で塗られたこの一帯



ドゥッガ遺跡の周辺の丘陵はオリーブや小麦が栽培されていた

が「ローマの穀倉」地帯と呼ばれる。年間を通して降水量は少なく、雨季に少量の雨が降る程度であるが、夏には、乾燥した気候に適したオリーブ・イチジク・トマト・ブドウ・

レモンなどを、雨が冬は小麦を中心に栽培する。夏にとれる農産物は、オリーブオイルやワイン、トマトソースなどに加工されて世界中へ輸出されている。

ステップ気候の南は、沙漠があるいはそれに近い地帯である。この地域にはベルベル人が多い。チュニジアにおけるベルベル人の人口比率は数パーセントときわめて少ないが、居住域は南部の沙漠地帯の周辺に集中している。

これには歴史的な経緯がある。肥沃なチュニジア中部で半農半牧の生活を送っていた定着農耕民ベルベル人は、十二世紀ごろから激しさを増した遊牧アラブ族（ベドウィン）に追われるように、南部の山岳地帯や沙漠周辺部に逃げ込み、他の世界と交渉を避けて、隠れるように独自の



ベルベル人たちは不毛の地に追いやられた。川底にわずかに水が残る。

ベルベルロイスラム文化を發展させた。

遊牧アラブ族は馬や羊にやる草がない極乾燥地帯には踏み込めなかった。タタウィン近くのドウイレット村は樹木も生えない不毛な土地の山



ドウイレット村

頂近くにできたベルベル人の集落である。崖の斜面に穴を掘り、住居にしている。彼らが頼りにするのは谷底に残ったわずかな水。私が訪れたのは五月の半ばだったが、雨が降った後に水が流れる川筋に灌木

がわずかにみられた。

いまは近くに新しい村ができて多くの住民はそちらに移動したが、数家族がまだ住み着いているという。廃墟のような村に似合わない新しい白壁のモスクが山の上の一番目立つところに立てられていて、礼拝に来た数人の男たちが村を見下ろしながらよもやま話に興じていた。

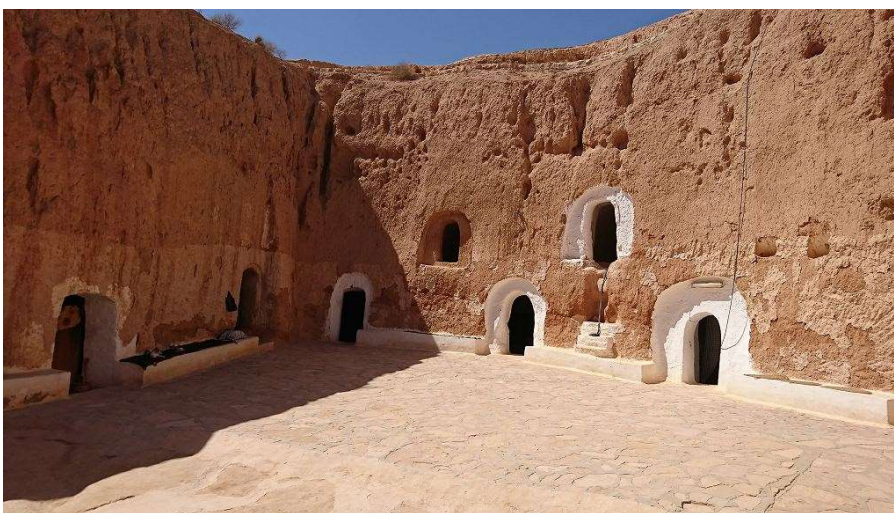
次に訪れたのは、クサール・ウレド・スルタン。クサールはアラビア語で「城」を意味する言葉らしいが、ベルベル人たちは石と土で造られた共同倉庫をこう呼んでいる。穀物や生活道具の倉庫であり、場合によっては住居としても使われた。

ドゥイレット村のように山岳地帯に造られたクサールは防衛上の機能が重視されたが、クサール・ウレド・スルタンはアラブとの抗争が一



穀物倉庫などのために建設されたクサール

段落し、襲撃の危険が薄らいだ十六世紀から十七世紀に平地に造られたクサールである。クサールは平和の時代になると市場や交易の場としての機能が重視された。



マトマタ周辺の竖穴式穴居住居

マトマタ周辺には竖穴式穴居住宅が見られる。地中深く穴を掘り、そのくぼ地を中庭とし、そこから横穴を掘って寝室や台所などの部屋が造られている。地中に造られているのだから、遠くから見たのではそこに

人が住んでいることはまったく分からない。

この住居は敵から隠れるためだけではなく、夏は強い日差しから逃れて涼しく、冬は保温性に優れて暖かい。ここでは通風は逆効果である。外から暑い空気が入ってくれば室内の涼しさを損なってしまう。

沙漠のオアシス都市トズールのメディナは日干し煉瓦の壁が美しかった。日干し煉瓦は粘土質の泥を一定のレンガの大きさの型枠に入れ、乾燥させたものである。

ドウズやトズールはサハラ沙漠の北の淵にあり、サハラ沙漠交易の拠点となった街である。街を取り囲む広大なナツメヤシの森から収穫するデーツは貴重な交易品として沙漠を超えて方々へ運ばれた。

ドウズやトズールから南は完全な



日干し煉瓦の壁が続くトズールのメディナ

沙漠である。数百キロにわたって広大なサハラ沙漠が広がっている。もはや人間の定住できる場所ではない。四輪駆動車でオフロードを走り、仮設のテントで一晩を過ごした。



ドウズから南へ30kmほどのサハラ沙漠の砂丘地帯

おすびに

チュニジアを三週間にわたって旅してきた。全行程は一七八〇kmに達



した。かつて本州最北端の下北半島
大間に、「東京まで七九八km」とい
う案内標識があったから、東京から
本州最北端を超え、札幌辺りを往復
したことになるだろう。いままでい
くつもの地名が出てきたが、位置関

係が分からないので戸惑った読者も
いるだろう。左に簡単な地図と訪れ
た道筋を示しておく。
今回のチュニジアの旅で私がもっ
とも注目したのは風土と住まいとい
うことである。日本は温帯モンスー

ン気候で夏は蒸し暑く雨が多い。湿
潤の国であり「人間いたるところに
青山あり」といわれるように緑と水
に恵まれている。日本の家屋は豊富
な木材を柱や梁に使い、その間の広
い可動空間に開け閉め可能な障子を
置き、部屋の湿気や暑熱を外に逃が
す工夫をしている。外に開かれた家
屋といえるだろう

チュニジアは地中海性気候、ステ
ップ気候、砂漠気候と、三種の気候
区分を持つ国であるが、いずれも雨
が少なく乾燥した気候である。これ
に対応するために、家屋は断熱性が
高い厚い石材や土で壁を作り、外部
との間に高い障壁を設けている。こ
のような建築は、周囲の過酷な自然
から隔絶した空間を得るといって、ア
ラブの沙漠地帯に発生の源を探るこ
とができる。

また住居が隙間なく建ち並ぶ高密度のメディナの居住環境は、中庭を核とした内に開かれ、外に対して閉じる中庭式住居を生み出した。

二十世紀のドイツを代表する哲学者であるO・F・ボルノーは『人間と空間』の中で「住まうこと」を「世間からはなれたやすらぎの領域」すなわち「人間がそのなかでは脅迫的な外部世界から身をひいていることのできる」場所であり、住まいは「安全に被護し守護するものの領域」と定義している。外部世界を「脅迫的」ととらえるようなボルノーの考え方に、私は違和感を抱かざるを得なかった。

木や紙でできた家に住み、外部に開放的な家に住んでいる日本人にとって、住居に対して外部から身を守る城塞のようなイメージを抱くこ

とにはすぐには同意しがたい。日本の伝統的な家屋は、縁側のように内だか外だかあいまいな空間が多い。しかし今回のチュニジアの旅で、いろいろな住まいに触れることで私はボルノーの「庇護性の思想」というものが少しは理解できるようになった。

住居と社会を二項対立的にみる見方は、荒々しい自然や民族間の抗争が激しかった歴史や風土が生み出したものなのだろう。

住まいのあり方は人間のあり方も深く結びついているのである。

二〇二二年八月吉日

Fujizakura

※この旅にはシニア・トラベラーの会（STF）の会員九名が参加した。いずれもタフでユニークな参加者であり、私はいろいろな面でお世話になった。おかげで愉快的旅になったことをこの場を借りて感謝する。